スマイルプリキュア！
～魔弾剣士と5人の戦士～

tubaki7

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

諦めたくなかった

逃げたくなかった

失いたくなかった

でも、だからこそ諦めてしまった夢はやがて棘となり突き刺さる。

忘れてしまったものは一体なんだったのか。色褪せた過去が色づき始める時、少年は運命と出逢う。

目次

プロローグ ―― 1
Episode1 ―― 11
Episode2 ―― 29
Episode3 ―― 38
Episode4 ―― 44
Episode5 ―― 54
Episode6 ―― 61
Episode7 ―― 77
Episode8 ―― 87
Episode9 ―― 94
Episode10 ―― 101
Episode11 ―― 105
Episode12 ―― 115
Episode13 ―― 128
Episode14 ―― 134
Episode15 ―― 145
Episode16 ―― 159
Episode17 ―― 178
Episode18 ―― 189
Episode19 ―― 200
Episode20 ―― 216
Episode21 ―― 224

プロローグ

乾いた音が夏の体育館内に響く。それを撃ったのは自分か、相手か。それも認識できない程自分の意識は朦朧としていたのを覚えている。

今から数年前、何度か経験した大会の空気だ。慣れているはずの雰囲気であるはずなのに今はそれがとても息苦しかった。暑さのむさくるしさと息詰まる空気の流れが呼吸を荒くし熱気とストレスが体力と精神力をガリガリと削っていく。

視界が翳む。相手が歪み、世界の全てがグニャリと変化し、それを首を振って元に戻すことで集中力を高めようと睨みを利かせる。まだ戦える、まだやれる、自分の〝剣〟はこんなものではないと言いきかせ一歩を踏み出す。

誰かの頑張れの声が聞こえた。踏み出す一歩が力強いものへと変わる。応援する声が選手に不思議な力を与えると言うことをよく聞くがそれもあながちバカにできないと思う。制限された視界の隅に少女の姿が見えた。手に汗握り手すりに力強くしがみ付き何故か涙と鼻水を垂らしながら絶叫するがごとく、自分が女の子だということもお構いなしにただ叫ぶ。周囲の大人たちや彼女の親が静かにするような宥めるも、少女はそれを振り払い叫んだ。声がかれるぐらいに。

力が沸いてくる。負けるもんかと相手の得物を真っ向から受け止め押し流す。スタイルもなにもあったもんじゃない。ただ勝ちたいという信念と執着心のみで相手に一太刀浴びせる。

より速く

より強く

より正確に。

そうして――――試合は意外な結末で終わりを迎えた。今から約6年前、小学3年の夏の出来事であり忘れもしない自分が好きなものから、そして全てから逃げた忌々しい日だった。

◇

いやな汗と不快極まりない夢で目を覚ます。もちろん寝起きは最悪、ただでさえ朝は弱いのにこの仕打ちは一体なんだと心中でぼやきながらベッドから降りる。目を覚ます為の第一手段としてカーテンにより暗くなった部屋へと日光を入れる。日差しは良好、今日も小春日和で温かい。が・・・・

「眩しい・・・・」

ハッキリ言って太陽の光でも目が覚めないものは覚めない、これは最終手段を使うしかないとシャワーへと駆け込んで服を脱ぎ棄てて蛇口をひねる。生暖かいお湯が汗を流してスッキリ爽快な気分へと誘っていく。こういうのを爽やかな朝って言うんだろうなと詩的な気分に浸りつつ朝食の支度を整える。この際だから少しこったモノにしたいところだがそれもこの家に暮らすもう一人の住人が決めることであって自分がどうすることもできないのを思い出しすこしアンニュイな気分になる。

「さくら～、俺のパンツどこ～」

「少しは気を使うってことしなよ！」

そう言いつつもちゃっかり自分の下着を持ってくる辺り出来た妹だなと少し鼻高々になる。自分と同じ黒く長い髪を二つに纏めた少女が脱衣所ドアの隙間からパンツを投げてきたことに対してなにも思うことはないのかと言われるだろうがそんなことは兄妹なので知ったこっちゃない。

一通り身支度が終わればころあいのようで朝食が二人分用意されていることにさらに上機嫌になる。今朝は和食、納豆に味噌汁、漬物にダシ巻き卵で備えに大根おろしとこれまた手の込んだものを用意したなと思う。相変わらずこの子の家事スキル・・・・というよりはオカンスキルは一体どこまで上がっていくのかと少し不安になる。・・・・まあ、エプロンをつけた姿はかわいいが、それでも持前のスキルのおかげでそれも他人にしか通用しないだろう。

ともあれ、朝食を食べることとする。朝食は一日の活力となる為毎日欠かさない。こういうのは小さい頃からの習慣がすっかり身に沁み込んだものからだからそうそう変えられたものではない。

だから、遅刻寸前でもその時間は欠かさないのだ。

「なに呑気なこと言ってんの！お兄そろそろ行かないとマジで遅刻するってば！」
「なんと」

急いで胃の中へと流し込み、鞄を担いで家を出ようとすると、玄関前にある荷物に目が行く。黒い大きな包みに長いケース、それは長年自分が〝逃げ続けている〟ものの象徴でもあった。

「・・・・今日は遅いのか？」
「うん。部活でね～」
「部活って、まだお前仮入部もしてないだろ」
「昨日出してきたよ。もちろん、道場の方も行くけどね」

鞄を持ち、荷物を担いで靴をつま先で数回たたいて履くとドアを開けて外へと出て行く。楽しいそうに、軽やかに踏み出す妹の背中を心底羨ましいと思いつつ自分も家を出て鍵をかけた。

◇

「いってきまーす」

母親の応答を背中に受け、ドアを開けてマンションの階段を降りていく。やがて登校する生徒たちの群れに合流し自身もその流れに従って歩を進める。足取りは軽やか、気分がいい。今日はなにかいいことありそうだと勝手に今日はいい日になると確信し若干スキップしながら一歩踏み出す。

が、それが余計だった。

「あうっ!?」

足がもつれて顔面から綺麗にすっころぶ。まるでギャグ漫画のワンシーンのような見事なころびように笑いを通り越して拍手さえ巻き起こるほどだ。自分のドジが心底嫌になるのと同時に周囲のよくわからない状況にとりあえず「どうも、どうも」と頭を

下げつつ逃げるようにしてその場を去る。

（どうしていつもこうなのさ～）

ドジで泣き虫。何一つ昔から成長がない自分の中身に再び嘆く。こんな自分でも何かできることをと探してみても結局なにも見つからずに変わりない毎日を送る日々。自分を変えるなんてこと、早々できるものではないとは思っていたがやっぱり簡単なものではない。

ふと、目の前を歩く見覚えのある後姿に早めていた足の速度を落として呼びかけるようにしてポーズをする。しかし、その声が声帯を通して出る前に別の声がその背中に呼びかけた。

「おっはよーつばき。今日もしけた顔してるねぇ」

「朝っぱらから爽やかな挨拶をどうも緑川。ところでその顔面一発殴ってもいいか？」

「お～コワいコワい。なんてね。おはよう」

「ったく…どうしてお前はちょいちょいそういう挨拶はさまないと接することができないんだ」

「まあまあ、近所のよしみってことで」
「保育園が一緒ってだけで随分となれなれしいな」
「あ、ひっどーい！それ結構傷つくんだよ？」
「そうか、よかったな。俺は全く傷つかない」
「つばきあんたねぇ・・・・」

ワナワナと拳を震わせる緑川なお。その怒りの矛先を唸りとともに定め、追い回す。その姿を後方から見ているだけの自分にまたため息をつく。この光景も、昔変わらない。といっても、この光景は割と最近だが。それでも嫌気はさすというもので――――

「どうかしましたか？」

声に振り返るとそこには穏やかで優しい笑顔を浮かべる上品な雰囲気を持つこの少女もまた、自と同じクラスの友人だ。

「れいかちゃん・・・・ううん、なんでもない」
「そうですか？…それにしても、相変わらず仲がいいですね。あの二人」

「そうだね。なんていうか、兄妹みたい」
「それは、鳴神君が上ということですか？」
「え、違うの？」
「私的にはなおの方が上に見えますが…」

もう一度じゃれあう二人を見る。・・・・うん、たしかに逆な気がしてきたと苦笑い。

「朝っぱらから元気やな～あの二人。よ、おはようさん」
「おはようございます。あかねさん」

続いて日野あかね。これで大体いつものメンバーだ。

「それにしてもよう飽きへんな、なんやつばきだけ態度がやたら違う気がすんねんけど」
「それほど気を許せる相手ということではないでしょうか？」
「そう・・・・かな・・・・？」

それは少し違う気もすると黄瀬やよいはじゃれ合う二人にまた視線を戻す。他の男

の子と態度が違うって言うのは多分つばき君の性格がなおちゃんの世話焼きを刺激したりしてるからじゃないのかな?と推測してみる。が、それもどうでもいいかと思考を切り二人の後を追うように歩く。

いつもの風景にいつもの時間。これが3年間ずっと続くと思っていた・・・・。

これは、一人の少年と。五人の少女達がおりなす波乱と笑顔に満ちた物語である・・・・

Episode1

「転校生を紹介します」

担任の佐々木なみえが開口一番にそう告げた。季節は春。夏に差し掛かったかのような陽気のこのよき日、寝るには絶好のポジションと時間帯だ。朝学校に登校し、窓側の一番後ろの席に陣取り佐々木の目の届かないよう前の生徒を盾にして伏せる。机のいい按排のヒンヤリ感と心地いい日差しの中少年、鳴神つばきは惰眠をむさぼる。入ってきた転校生とクラスメイトのやんや騒ぐのもどこ吹く風のように右から左へと流しひたすら寝ることに徹する。今日は珍しく午前中で本日の授業は全て消化されるため昼に何を食べようかと考えながら徐々に眠りの中へと落ちていく。

最中、誰かが話しかけてきたがそれももはやつばきの耳には届いていなかった。

◇

「起きんかい！」

拳が後頭部を直撃し、その衝撃でさらに机に額がクリーンヒット。これは見事だと被疑者である日野あかねは「ほぉ～」と感心の声をもらす。

「中々ええモンもってるな。やっぱウチとコンビ組まへんか？」
「誰が組むかこの暴力女！もっとやさしく起こせんのかおまえは!?」
「だって鳴神やしな」
「俺の存在意義っていったい・・・・」

泣きたくなってきたとため息をつく。時計を見ればすでに時刻は昼の１２時を指している。綺麗に一ミリのずれもなく重なった２本の針を見て今日もお勤めご苦労さんと言わんばかりにチャイムが自らの役目を果たす為に鳴り響く。チャイムが鳴る前にＳＨＲを終えるとはさすが時間に正確だと評判の我らが担任だと感心しつつ鞄を担ぐ。

「うし、帰ろう」

「ごめん、ウチ部活なんよ」とあかね「私も同じく」となお「私は生徒会の仕事が」とはれいかだ。

「しゃーないか。黄瀬、帰るか」

「う、うん」

誘われないだろうと思っていたからこそ驚愕も大きい。内心では飛び跳ねているが外面ではギリギリそうなるのを抑えることに成功する。まともに会話も最近はしていない為か少しぎこちないのはしかたないと鞄を持って教室を出て行くつばきの後を追いかける。

「そーいや黄瀬はなんか部活入ってないのか？」

「うん。どれもピンと来なくって」

この学校が珍しく強制入部式でなくてよかったと思う。下駄箱で土足に履き替えて玄関から校門へ、そして帰路へとつく。道中、話した会話はつばきの振った話題だけで

やよいはそれ以降につづく沈黙に慌てふためく。

どうしよう、何を話そう。昨日のテレビ？好きなマンガの話？話したいこと、知りたいことがたくあんあるのに、それが纏らないから言葉にできない。だからこそ、黄瀬やよいはよく引っ込み思案と勘違いされることが多い。本当は喋ったらそれなりには賑やかな方に入るのだが、交友関係に日野あかねがいるせいでそれがかなり翳んでいるのである。

そう、ただ纏らないだけなのだ。決して男子が苦手というわけではない。断じて。

「黄瀬ってさ」

いきなり名前を呼ばれてドキッとする。

「そんなに静かだったっけ？」

ついに言われたその言葉。これが漫画とかアニメの世界だったら〝ガーン！〟というエフェクトが付くに違いない。そうしてくれれば目の前の彼にも自分の気持ちのわだかまりが少しは伝わるのだろうが、あいにくと現実はそう甘くはない。

「そ、そうかな？」
「なんか最近よそよそしいって言うかさ。俺、なんかしたっけ？」

純粋にただ何喋っていいかわからないだけなんです！と心の中で叫んでみる。それじゃダメじゃんとまた内側で一人ツッコミを入れる。こんなこと繰り返してるからいつになっても対人恐怖症とか恥ずかしがり屋だとか、引っ込み思案とか言われるんだ。

・・・・まあ、二つ目以外はだいたい当たってるんだけど。

でも、と自分を律する。このままでは何一つ進展しない。ここは思い切って一歩踏み出すべきと噴気して口を開いた。

「ちゅ、ちゅばききゅん！」

噛んだァァァァァァァァァ！！！！！。心の中でまたしても絶叫。派手に原型を粉々にして噛み倒したことにいい加減泣きたくなってきたと内心でも外見でも羞恥で泣きそう

になるも、ポカンとした表情から相手の顔が一変。次の瞬間には腹を抱えて笑い出した。

「ちゅ、ちゅばききゅんだって、あはははは！い、イテぇ、腹イテぇ、あはははははっ！」

なにもそこまで大笑いしなくてもいいと思う。泣きたくなる衝動が今度はちょっとした怒りにベクトルチェンジすると一緒にどこか安堵した感覚を覚える。

（つばき君のこんな顔、久しぶりに見たかも・・・・）

いつもほぼ仏頂面というか、不機嫌そうというか、あまり人当りのよくない顔をしている印象があったからいつしか自分もそういう印象をいだくようになっていた。本来の彼はこんな風に無邪気に笑う年相応の男の子だ。すこし大人びて見えるけど、本当はこんな表情もするんだと小さい頃の記憶を思い出しながらふと笑ってみる。

「なに笑ってんの。ちょ、やめてくれるかな？」

「上げて落とされた!?」
「人聞きの悪いことを言うな」
「うぅ～、やっぱりイジワルだよぉ・・・・」

前言撤回。やっぱり小悪魔みたいだと思う。

「・・・・ジョーダンだよ」
「え？」
「だから、ジョーダン。マイケルだよ」
「ごめん、さっぱりわからないんだけど・・・・」
「ああ、そういやこういうノリできなかったなおまえ・・・・」
「ごめんなさい」

一応謝っておく。「気にスンナ」と不意に頭を撫でられたことにあわわとなりながらも久しぶりのその感触に少し浸る。

「黄瀬って妹みたいだよな。なんかウチの妹よりも妹らしい」

「そういえば、さくらちゃん元気？」
「ああ。この前もさ――――」

ここで、少しの違和感に気づく。・・・・・いつからだろうか。彼女のことを〝黄瀬〟と苗字で呼ぶようになったのは――――・・・・

◇

やよいと別れ商店街をふらつく。食事当番であるさくらが戻るまでは料理のできないつばきは一切ないも口にできないため仕方なく足を伸ばしなにかないかと食糧を調達の為にやってきたのだ。
が、そこで意外すぎる光景を目撃する。なんと屋根の上を二足歩行で狼が走っているのだ。

「・・・・俺もいよいよ厨二病をこじらせたか」

俺の右腕が疼く!とかやってみようかと思いいたるもあいにくと今はツッコミ役不在の為それもしない。では何をするか。そんなことは決まっている。

「好奇心は止められないさ!」

もちろん追いかける。あんなもんが街にいる、そんな奇想天外な光景を是非この目でしっかりと焼きつけておきたいとダッシュする。

さて、どれぐらいたっただろうか。気が付けば狼を見失い、どこか辺りの雰囲気も暗い。というか空が変だと辺りを見回す。まだ2時にもなっていないのにこの人気のなさと雰囲気は不気味すぎると怪訝に思いつつ仕方がないので歩き回ることに。

突き当りを右へ、今度は左へ・・・・。そうしている内に、今度は目の前が轟音をたててたてものごと吹っ飛んだ。なんだ、爆発事故かと野次馬根性を発揮し行ってみる。すると、そこにはなにやらコスプレみたいな恰好をしたピンクの少女がボロボロで倒れていた。

ただ事ではない。瞬間的にそう判断したつばきのとった行動は彼女の元にかけより

呼びかけること。

「おい、大丈夫か!?」

反応がある。息をしている。身を起こす辺りまだ躰は動くようだと安堵すると、此方をみた少女が「あ～!」と声をあげた。

「あなた、たしか隣で寝てた・・・・」

はて、なんのことかと首を傾げると同時につばきの思考は数時間前まで遡る。隣の席で寝ていたというキーワードから推測し、その時自分の右隣が誰だったのかを思い出して声をあげた。

「誰?」

すっ転ぶ少女。覚えてないのと苦笑されたことに当たり前だと返す。

「寝てたんだからな」

「それ胸張って言うことじゃなと思う・・・・」
「それもそうか。で、なんなんだこれは」
「それは――――」と言いかけて彼女が動いた。此方を庇うかのように抱いて飛ぶと、そこを大きな何かが通過してさらに後方の建物を壊したことに驚愕する。
「なんじゃこりゃあああああああああ!?」
「なんだテメー。このバッドエンド空間で普通に動けるなんて・・・・」
立ち込める煙から一つのシルエットが出てきた。先ほど見たあの狼だと後姿から推測する。
「狼が喋ってる!?」
「気を付けるクル！あいつは悪い奴クル！」
「今度は子豚のぬいぐるみが喋った!?」
「キャンディは子豚じゃないクル！」

少女の陰からひょっこり顔をだしたこれまたお目に掛かれないぬいぐるみのような愛くるしい生き物が話しかけてきたことに軽くパニックになる。

「なんだか知らねーが、まとめて消えろ！」

狼の声がまるでなにかに命令するかのように響く。「アカンベー」という声とともに現れたのはあの巨大な腕の正体であろう生き物――――いや、はたして生き物なのだろうか。

「危ない！」

立ちふさがり、巨大なパンチを受け止める少女。その華奢な躰からは想像もつかないようなワイルドさに一瞬見惚れてしまうも、ハッとなって叫ぶ。

「何してんだ、逃げろよ！」

「ダメ！それじゃキャンディも鳴神君もあの狼さん達に怪我させられちゃう！」

「んなことどーだっていいだろ！つか、なんで俺の名前・・・・」

「わ、私星空みゆき。今はキュアハッピーっていうれしいんだけど、よろしく・・・っ！」

笑顔でいう星空みゆきことキュアハッピー。そんなことしてる場合じゃないとツッコミを入れるも彼女は一向に逃げる素振りを見せない。

「プリキュアってのも大したことねーな。やっちまえアカンベー！」

再び化け物が振りかぶり、拳を向けてきてそれをまた受け止める。

「だから逃げろって！」

「ヤダ！」

「〜、なんでそんな頑張ってんだよ！怪我すんのは俺らじゃなくておまえだろ!?しかも俺なんかまだ逢ってまともに会話なんて――――」

「自己紹介した！だったら、他人なんかじゃないよ！」

言おうとした言葉を先に言われ、しかも否定されたことに驚くつばき。無茶苦茶な理

由に「は?」となるもなにも言い返せなくてただ彼女の言葉を聞く。

「これから一緒に勉強したり、学校生活を送るクラスメイトだもん。こんなことに巻き込まれて怪我させるなんて、私は絶対に嫌だ!」

「だからって、こんな・・・・」

「それに、まだ鳴神君とお話してない!せっかく出逢えたのに、なにも話せないでお別れなんて、したくない!」

無茶苦茶だ。馬鹿げている。でも、なぜか心に響く言葉。それがつばきの中に眠る何かを呼び覚ます。

「〜、だあああもう!」

傍に落ちていた鉄パイプを握り、受け止めていた腕向けて振り下ろす。鋭い太刀筋はアカンベーの腕を叩き、強烈な打撃となって痛覚を刺激した。

「わけわかんないけど・・・正直逃げ出したいけど!でも!必死に、それも命がけで頑

張ってる女の子目にして自分だけ逃げるなんてそんなカッコ悪いマネできるわけないでしょ！」

足が震える。声が裏返る。それでも鳴神つばきは逃げない。背に守るべきものが――〝あの時と同じように、か弱い者がいる限り〟。

「ハッ、めんどくせぇ・・・・さくっとやっちまえ！アカンベー！」

ふたたび振り下ろされる腕。絶体絶命かと思われたその時、光が瞬いた。

◇

「・・・・は？」

そこは一面何もない空間。先ほどまで相対していた化け物たちどころかみゆきもキャンディもいない。どこともない、逸脱した空間に鳴神つばきは立っていた。

［力が欲しいか］

突如響いた声に振り向く。そこにはブローチのような大きさの龍の顔があった。

［力が欲しいかと聞いている］

どうやら声の主は此奴らしい。そう判断して問いかけてみる。

「おまえ、いったいなんなんだ?」

［俺の名前はゲキリュウケン。鳴神つばき、力が欲しいか?］

どうして名前を、と言いかけたところでその言葉を呑みこむ。どうせ此奴も訊いたところで後回しとか言われるんだろうと諦めでそれを言わず逆に問いかけられている質問に対し答える。

「・・・・ヒーローなんて、絶対になれないと思ってたけどさ。この際その元がどちでもいいや。いいぜ。よこせよ。その力って奴をさ」

［・・・・契約成立だ］

◇

光が晴れていく。それがやがて目の前で腕を受け止めている陰に収束していき、その場に居合わせている全ての視線がそこに注がれる。腕を弾き、やがて光が納まったそこにいたのは白い鎧を身に纏い、龍の装飾をあしらった独特の形をした剣を持つ剣士の姿があった。

「あれは、プリキュアと並ぶ伝説の戦士クル！メルヘンランドを守護する伝説の剣に選ばれた戦士、その名も――――」

『リュウケンドー、来迅！』

今、ここに運命が動き始めた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２

『なんだ、コレ・・・・俺どうなっちまったんだ!?』

急に自分の躰が変わったことに鳴神つばき――――リュウケンドーは軽くパニックになる。それを見かねて彼が握る剣であるゲキリュウケンが宥める。

［落ち着け。それは鎧を纏ったおまえの姿だ］

『剣が喋った!?』

［だから落ち着け。いいか、おまえの躰には今力が宿っている。目の前の敵を倒すことができる力が］

ゲキリュウケンの言葉を聞いてリュウケンドーは自分の手、そして相手とを交互に見る。力がある、守るものもある。それができるだけのものがあって、やるべきこともわかっている。だったら迷う必要はない。ただまっすぐに向かって――――切り伏せる

のみ。

『力・・・・なら、安心だ』

剣を構え駆けだす。アカンベーが狼、ウルフルンの指示で踏み込んでくる。リュウケンドーはそれを真っ向から迎え撃ち、繰り出された拳を切り払ってカウンターを叩き込む。相手が後ろに体勢を崩すとそこへすかさず回し蹴り。吹っ飛ばされたアカンベーは巨体を地面に打ち付け、数回バウンドしてから後方にある家を壊しながら倒れる。それを見たウルフルンは悔しさを通り越して予想外すぎる相手に驚愕し口がみっともなくあんぐりと開いていた。

『す、スゲー！躰がめっちゃ軽いしなんか力が漲ってくる！』

［油断するな。まだ浄化できたわけじゃない］

ゲキリュウケンの言葉にハッとなったキャンディが慌ててハッピーの肩に飛び乗り、

「そうクル！プリキュア・ハッピーシャワーでアカンベーを浄化するクル！」

起き上がったアカンベーと自棄になったウルフルンをリュウケンドーが抑える。剣を縦横無尽に振り二対一の状況でも全く押されているようには見えない。むしろ彼の方がおしていると言っていい。まるで戦い慣れているようなその動きは素人目のハッピーでもわかるほど手練れていた。その姿に少し見惚れているとキャンディのごうを煮やした声にハッとなって「わ、わかった」と慌てつつ構える。

「リュウケンドー！今からハッピーシャワーを使うクル！それでアカンベーを浄化するクル！」

『よっしゃ、わかった！』

パンチを切り払い、ウルフルンを蹴り飛ばして相手から距離を取る。

そして――――

「プリキュア・ハッピーシャワー！」

これで勝負が決した。誰もがそう三者三様のリアクションをしている。リュウケンドーはヒーローの勝った姿と言えば背中で爆発がドーンだろと言わんばかりにマスクの中ではドヤ顔で後ろを向き、ウルフルンとアカンベーはいつ攻撃が飛んでくるかと目をつむる。が、いつになってもなんの変化もない状況に誰もが頭に〝?〟を浮かべる。

『・・・・おい』
「ハッピーシャワー!」
『おいって』
「ハッピーシャワー、ハッピーシャワー、ハッピーシャワー、ハッピーシャワーーーーーー!」
『コラッ!』

脳天を殴る。なかなかいい音をした証拠にハッピーが頭を抱えて涙目でう〜と呻る。そしてキッとリュウケンドーを睨んで、

「なにすんの!?」
『アホ、それはこっちのセリフだっつーの!期待持たせといてこのオチとか笑えねーっ

つーの！俺のドヤ顔返せ！』
「返せとか言われてもマスクつけてるからわかりっこないじゃん！」
『いいんだよ、こういうのは気分なんだ気分！』
「はっぷっぷ～」

などと此方をそっちのけで口げんかをはじめだす二人。こいつら、ひょっとしてとんでもなくバカなんじゃないかと半ば失せた戦意をなんとか絞り出しアカンベーにチャンスだと命令を出す。今なら確実にあの邪魔者二人を仕留めることができると踏んでアカンベーも意気揚々と先ほどのお返しとばかりに伸びる腕を繰り出す。
が、

「『今取り込み中！』」

あっさりと弾かれて逆に自分に当たる。

『だいたい気合いが足んねーんだよ気合いが！気合いを込めろ！』
「あ～もうわかったよ！気合いだ気合いだ気合いだ気合いだあああああああああああ

ああああ
!!!!!!!!」

ハッピーがやけくそとばかりに気合いを連呼し顔を真っ赤にする。すると、どうだろうか。それまでただの飾りとばかりに思っていた腰のポーチに桃色の光の粒子が溜まっていくのが見える。それを見てリュウケンドーが『マジか!?マジで発生条件気合いか!?』と驚愕する。

満ちたエネルギーを指先に移動。身体全体を使って大きくハートを描くようにして腕を振るい、収束されたエネルギーをハート型に縁取った手でキャッチ、腰だめに構えたそれを押し出すようにして前方へと放つ。ハッピーの手から離れたエネルギーの本流はさながら名を体現するかのようにシャワーとなって広がる。その桃色の光はアカンベーを呑みこみ、リュウケンドーを翳めて浄化する。

「な、なにこれ、すっごい疲れる・・・・・」

『おまえな～、俺まで巻き込む気か!?』

［大丈夫だ。こちらには害はないから死んだり怪我することはないから安心しろ］

『そういう問題じゃねーだろ!』

なんなんだこいつらは。アカンベーを倒し、さらには敵の前だというのにこの余裕。だが――――

（油断している今がチャンスだ！）

せめてもとウルフルンはすっかり油断しきっているとみられるリュウケンドーめがけて爪を立てる。このタイミングなら確実に仕留められると確信しての行動。が、それはかえって致命的な判断ミスとなった。

繰り出された爪を、剣を翳すことで受け止めて弾く。カウンターを喰らい転がるウルフルンはいったい何が起きたのかわからずに目を見開く。こいつ、いったい今なにをした・・・・!?

『そんだけ殺気だしてりゃ気を抜いてたってわかるっての。・・・・こういう時だけはあのじーさんに感謝だな』

腰のホルダーを回転させ、マダンキーを引き抜く。これが何に使うべきなのか頭に流れ込んでくる情報を処理せずそのまま行動に直結させ抗うことなく躰を流していく。

『ファイナルキー、発動！』

ゲキリュウケンにマダンキーを差し込み、ロードする。それから読み込まれた情報がゲキリュウケンという端末を介し術式が発動され剣にエネルギーが纏われていく。それを腰だめに構まえ、一気に振り抜く。

『ゲキリュウケン、魔弾斬り！』

斬撃をウルフルン向けて放つ。斬撃を受け、浄化寸前まで追い込まれるウルフルンは躰を駆け廻る激痛とも呼べる痛みに悶え、叫ぶ。その断末魔のような声を聞きながらリュウケンドーはゲキリュウケンを振り抜いたモーションから背中を見せたまま呟く。

『闇に抱かれて眠れ・・・・』

眠る――――死ぬ、存在が消える。そのワードがウルフルンの脳内を占め、彼を消えゆく淵から奮い立たせ、浄化の光をなんとか振り払い、撤退する。それを背中越しに気

配で感じとり、戦闘が終わったことに息をつく。そしてハッピーに歩み寄り、

『まあ・・・・なんだ。大丈夫か？』

「う、うん・・・・」

差し出した手を握った彼女を引き上げる。さて、これからどうなることやら・・・・そう考えながら。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３

「これがキュアデコルクル」

落ちてきた小さなアクセサリーをキャッチしてこれがその代物だと二人に見せる。みると本当に〝こっちの世界〟で一般的に知れているデコルのそれとそっくりだ。

［キュアデコルはマダンキーと同じくロイヤルクイーンの復活に必要なものだ。そしてデコルのみが今敵の手に渡っている］

「ちょい待ち。なんでデコルだけなんだ?」

変身が解けたつばきが小型の端末となって腰についているゲキリュウケンに問う。

［マダンキーはデコルとは対を成している。例えば、デコルが扉を閉める錠前ならキーはその名の通り鍵というわけだ。奴らにとってデコルは素材としてはうってつけ

だったようだが、マダンキーはその力が非常に不安定だ。魔弾騎士やロイヤルクイーン以外が使えば暴発してしまう程に危険なものなんだ」

「なるほど、さっぱりだ」

［・・・・ようは危険だから手を出さなかった、ということだ］

呆れぎみに呟くゲキリュウケンだがどうやらつばきだけでなくキャンディとみゆきもわかっていなかったらしく同じ反応を示している。本来であればこういう役目はプリキュアを探してくるよう使命をおったキャンディの役割のはずなのだがと頭を悩ませる。

［プリキュアの適格者はほかにもいるはずだ。探し出して、奴らを倒さなければこの世界にも魔の手が伸びる］

なんだが本当に漫画の世界だなと呟くつばきだったが、そこでようやく自分とみゆきの距離が異様に近いことに気が付いてサッと距離を置く。その動作を不思議に思ったみゆきは首を傾げた。咳払いを一つ。

「つまり、だ。おまえ達は国を滅ぼされたが、それに敵を足止めすることに成功してはいる。だが敵も親玉の復活をもくろんでいて、それよりも早くプリキュアを全員揃え、デコルを回収してその女王様とやらを復活させなくちゃいけない。そういうことだな」
「そうクル！ちみ達は伝説の戦士プリキュアと魔弾騎士に選ばれたんだクル！」

キャンディが嬉しそうにはしゃぐ。みゆきがそれを聞いてまるでファンタジーの世界だとはしゃぐ。が、それとは正反対につばきはため息をついた。それに何故と問われたのでなにもわかってないなと言ってから口を開く。

「いいか？それを受け入れるってことはさっきみたいな奴らとまた戦わなけりゃいけないってことだ。それは避けて通れないだろうし、少なからず負ければそれは直結して死ぬってことにもなるかもしれない。しかもこっちは命かけてるのにこいつらにメリットばかりで俺達にはデメリット、しかも超ド級のしかない。この条件ではいけじゃあ一緒に頑張りましょうってのは笑えねー冗談だな」
「でもキャンディたち困ってるんだよ？それを見過ごすことなんてできないよ」
「お人よしは結構だ。だが困ってるからと言って自分が賭けるモンがデカすぎる。一生丸々棒に振って負ければ死ぬんだぞ？さっきのアレでもう俺ら目をつけられたような

もんだぜ」
「だからて――――」
「なぁ転校生。自分の命と他人の命、天秤にかけて重い方はどっちだろうな？」
「そんなの・・・・・」

言葉が出てこない。どう言ったらいいのかわからずみゆきは口どもってしまう。

「遊びじゃないんだ。これは紛れもない現実、絵本のお話みたいにキラキラハッピーエンドなんかじゃない。バッドエンドと隣り合わせ、一歩間違えれば取り返しのつかないことにだってなる。それでもやる覚悟ってもんがおまえにあんのか？」
「・・・・鳴神君にはあるの？」
「ある」

つばきの即答にみゆきは問う。「どうして」と。つばきは答える。「失くすものがないから」と。

「俺って結構周りと比べてちょっと人生ハードモードになってるらしくってさ。もう小

学校のころからずっと何か失くしてばっかなんだよ。だから今更なにか失くしたって悲しくもなんともないんだ」

ケラケラと笑いながら言うつばき、その顔はどこか悲しげで、辛そうで。でもなぜか枯れたようになにも出てこない。それをみたみゆきの印象はこうだ。

〝綺麗な作り笑い〟

それを見て、みゆきは自然と拳を握っていた。

「・・・・決めた。私、やっぱりやるよ」

「・・・・人の話聞いてたか？」

「バッチリ。でも、やっぱりほっとけない。私は、バッドエンドな結末なんて認めない。もしそんな決まったラストなら、ページを破いてでもハッピーエンドに書き換えてみせる。それがどんな無茶苦茶なことでも、辛くても、みんなでウルトラハッピーになれるなら、私は頑張れる。戦える。それになんだかつばき君一人に任せてたら心配だし」

「おまえは俺の母ちゃんか何かか。つかしれっと名前で呼んでるし」

「嫌だった？」
「・・・・好きに呼べば」

そっぽを向いて鞄を担いで歩き出す。

「来いよ。ここら辺わかんないだろ？道案内してやる」
「うん！」

先ほどとは違い笑顔でつばきの隣にならぶみゆき。素直じゃないなと横目で顔をのぞき見つつ、そんな彼の不器用なところがおかしくてクスリと、小さく笑った。

「つばき君」
「ん？」
「・・・・これからよろしくね」
「・・・・おう。〝みゆき〟」

Ｅｐｉｓｏｄｅ４

どうしたもんか、そう呟きながら腕を組んでうーんと呻りつつ思考を巡らせる。
プリキュア、メルヘンランド、ロイヤルクイーン、やることの密度は高いし難易度もかなりのものだ。いったいどこまで自分の人生はハードモードに行けば気が済むのかと軽く居もしない神様に嘆いてみるも答えは出ることなんて当然ない。深いため息をつくとゲキリュウケンが話しかけてきた。

［ため息をつくと幸せが逃げていくという人間のことわざにあるらしいが］
「もうとっくに逃げる幸せもねーよ。つか、お前公共の場で話しかけんなって言ったろ」
［仕方がないだろう。つばきの魔力値が低すぎて念話が使えんのだからな］

ぐうの音も出ない。魔力、つまりつばきが元々持っているゲキリュウケンやマダンキー以外の精神エネルギーのことを意味しそれを総称して魔力と言う。この魔力、プリキュアにもあるらしいのだがマダンキーを使わないプリキュアにはあまり関係のない

話ともいえる。
　話を戻そう。つまり、つばきの場合、魔弾騎士のくせに魔力がビックリするくらいに低いということらしい。ゲキリュウケンの調べでは普通は５あるものが２しかないらしい。つまり、ミジンコクラスの魔力しかないと言うことだが、それなのに自分を扱えたあげくリュウケンドーにまで変身できるのが不思議で仕方ないとのことだ。

「おはようつばき君！」

　通学路の向こう側にピンクのロール頭が揺れるのが見える。なんともあさからハイテンションな娘だと思いながら挨拶を返そうとしたつばきだが、後頭部に突如衝撃が走ったことに悶える。地味に痛い。

「おようさん、今日も・・・・って、いつの間に星空さんと仲良うなったんや？」
「昨日迷子になりかけてたから助けただけだ。それから日野、頼むからお前一発殴らせてくれ。一発でいいんだ」
「あんたそれ乙女にするお願いとちゃうやろ」
「仲良いね二人とも」

「よくない」

いや仲いいって。そう心の中でつぶやきながら苦笑を返すみゆきだった。

◇

プリキュアは全てで5人。それがゲキリュウケンが持ちうる全ての情報だった。現在は星空みゆきことキュアハッピーで一人。あと残すこと4人ということらしいがはたしてこの学校内でその人材確保ができるのかが激しく疑問だ。そもそもそう都合よくこの学校に残りの4人が存在しているなんてそんな都合のいい展開があるわけがないとつばきは中庭の池、その畔にある小屋のような場所でパンを貪りながら思考する。こう見えて、考えることはちゃんと考えるタイプだ。

ゲキリュウケンの話はこうだ。プリキュアにはそれ相応の魔力の持ち主が覚醒できる。が、魔力を持っているからと言って皆が皆プリキュアになれるわけではない。〝資

質の他にプリキュアになるにふさわしいモノをもった人間のみ〝が覚醒できるらしいのだがそれがなんなのかはわからないとのこと。結局のところ今わかっている情報はこの学校内で魔力の高い人間が４人いること。しかし、それが誰なのかはわからない。つまり特定まではできない。・・・・・できなこと尽くしか。思考を切る。

「どん詰まりか。これで他のメンバー探せなんて無理だろ」
「何の話？」
「プリキュア集めの話」
「へぇ・・・・」
「・・・・んだよその目は」
「いや、つばき君もそんな真面目に考えることできるんだって思って」
「おまえの中での俺っていったい・・・・」
「イジワルさん」
「ぎゃふん」

　弁当の入った袋を持って現れた星空みゆきにため息をつく。いちどこの少女とはとことん話し合った方がいいかもしれないと本気で考えだすつばき。

「と、冗談はそれくらいにしてさ。私二人目は日野さんがいいかな～なんてお――――」
「却下だ」

ですよね～とはみゆき。当たり前だとはつばきだ。そしてやっぱりわかってないと息をつき、

「いいか？俺達は敵さんにとっちゃ邪魔以外の何物でもないんだ。仮に日野をプリキュアに誘ったとして、覚醒できないまま戦闘になったらどうする？彼奴を護りながら戦えるか？無理だね。俺は無理だと断言できる。昨日今日変身して初陣だった俺達がコンビネーションのコの字もできてない内から他人を護りながら戦うなんてリスクが高すぎる。もっと慎重にだな――――」
「日野さん、プリキュアやろ～！」
「フリーダムすぎんだろおまえ!?」
「ごめん。無理や」
「そしてあっさり断られた～…」
「でしょうね」

◇

「大　爆　笑　！」
「笑わないでよ・・・・虚しくなる」

みゆきが断られた理由。それは「部活があり、さらに大会が近いから暇がない」ということだった。コレを笑い話としないでなんとするとばかりに笑い転げるつばき、その姿にムッときたみゆきは「えい！」と力んで対してこもっていない力で背中を叩く。が、それが天罰への引き金となったらしくバランスを崩して土手を転げ落ちる。夕暮れの、しかも下校途中という時間帯にも関わらず人がいなかったことに心底安心するみゆき。もしあと少し変えるのが遅かったらちょっとしたサスペンスドラマみたいなことになっていたかもしれないと思うとゾッとする。

「生きてる～？」
「おまえ、キャラ変わってないか？」
「そんな気がする…」

痛さはない。芝生がいいクッションになってくれたらしいが実際受け身を取っていたためそこまで衝撃はないがそれでも危なかったと本気で思う。

「・・・・なにやってるんやあんたは？」
「おう日野。今日のパンｔ――――へぶう」

言う前に顔面にバレーボールの強烈な一撃。これは当然の報いだと鞄の中のキャンディとうんうんと頷く。

「星空さんもようこんな奴と一緒におるな」
「え～っと。それには深いワケがありまして」
「・・・・ハッ、まさかそういう理由――――」
「少なくともお前が想像してるようなことではないから安心しろ。つか、お前こんなと

こで何やってたんだ？」

恰好からして下校途中というわけではない。制服ではなく体操着、そして両肘と膝についているのはバレーボールをやっている人なら誰もが持っているサポーターだ。それを見る限りは・・・・

「一人で練習か？」

「ん・・・・まあそんなとこやね」

あははとばつが悪そうに笑うあかね。その横顔はどこか哀しそうに見えたみゆきは反射的に言葉を言う。

「私達も手伝えないかな？」

「・・・・はい？」

「だから、私達もなにか手伝えないかなって」

突拍子もない発言につばきは心底嫌そうな顔をするも、死角からきたみゆきのひじ打

ちにより悶える。この女、扱い方を心がけてきたのはまあ認めるとしても本当に転校してきた当初の純粋でキラキラしたモノはどこへかなぐり捨ててきたのか、そう考えるとちょっと悲しくもある。

だが、今はそんなことはどうでもいい。

「手伝うって、何を手伝うんだよ?」

そう。この猪突猛進娘はなにも考えていないのが明白。人の役に立ちたいとか、力になりたいという考えは立派だし否定はしない。だが計画性が微塵もない善意ほど悪意に近いものはない。つばきはそういう考え方だが、みゆきはそんなことさえもどうでもいいらしい。とにかく、目の前で困っている人がいたらかたっぱしから助けてまわる。無謀だ。

だからこそ、ストッパーが必要になる。

「・・・・しゃーない。まずは相手だな。男の俺でいいなら練習相手になるぜ?」

「ええんか!?」

「乗りかかった船だし、まあ、暇だしな」

「つばき君て、案外優しい？」
「案外は余計だっての。ホラ、やるぞ」
そう言って鞄を置く。オレンジに染まる夕焼けが、世界を染め上げた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５

解せないなぁ・・・・。溜まった不満を心中で呟いてみる。外には溜息という形で吐き出し一物の不満を解消しようとしてみるもそれもあまり意味がなかったことに悩みを抱える。

「随分と深いため息だね？」

隣で弁当を食べるのは黄瀬やよいだ。幼いころから親睦のあった彼女とはここ最近疎遠だったが数日前からはこうして一緒に昼食を共にするようになっている。未だ苗字で呼んでいるのは変わらないが。それでもこうして誰かと昼食を共にするというのは妹以来久しぶりのものとなる。今は黙っているゲキリュウケンでこそ一人でいるときは話しかけてくれるが、それもふつうの話ではない。

そう、いい例が――――

〔んん、〕

　咳払いしてそれが何なのかを悟る。ゲキリュウケンも馬鹿ではない。関係のない者がいる前では一方的に念話を送り、必要な要件のみを伝えるという手段をとっているが二人の決め事。それ以外では喋らずちょっと厨二臭いアクセサリーを装うというのが普段の彼だが、このように、主であるつばきが「これは頼む」ということのみを了承し行っている。それがこれだ。

「悪い黄瀬。ちょっと我慢してくれな」

「え？――――――むごっ」

　急に口を手でふさがれて壁に押し付けられる。あまりにも急すぎる展開に心臓が口から飛び出そうになるような錯覚と鼓動が早くなるのを感じる。漫画でよく見た展開にやよいの頭は絶賛パニック中だ。何で、とか、どうして、とかそんな言葉しか出てこない。

もしかしたらこのまま――――――。そんなあらぬ方向に思考が妄想に変わる寸前にバタン！と音を立てて屋上の扉が開いた。そして聞こえてきたのは、つい最近転校してきた元気いっぱいのあの子。

「つばき君～…てあれ？たしかここにいるって聞いたんだけど・・・どこか行っちゃったのかな？いつも居ないし、フラッとどっか行っちゃうし・・・はっぷっぷ～」

不満全開で出ていく星空みゆき。その姿を陰から見ていたつばきはホッと溜息をつくとなんだそういうことかと状況を理解し一気に思考がもとにもどる。

残念だったような、安心したような。複雑な感情が入り混じってやよいはつばきに不満をぶちまける。

「いきなり酷いよ。怖かった」

「悪い。急なことだったからこうする以外なかった」

「もう。けど、どうして星空さんから逃げてるの？」

やよいが落としたスケッチブックを拾いながらポンポンとついたほこりを払いなが

ら質問すると「う～ん」と悩む。少しすると口を開いた。

「・・・・別に嫌いってわけじゃないんだけどな」

「じゃあどうして？」

「・・・・黄瀬と居たい、から？」

そうして疑問形と質問で返そうとした言葉を飲み込み言われたことに浸る。

――――黄瀬と居たいから。

その言葉だけで、やよいの心は天にも昇るような思いだった。嬉しくて自然と頬が綻ぶ。

「なんかヘンなこと言ったか？」

「それ、結構クサいよ？」

「そうかな？割と自信あったんだけどな」

それで本当に射抜いてくるんだから手におえない。嬉しさと幸せな気持ちがいっぱいになって溢れるのを止める術を知らないやよいはただその波に心を浸からせた。

「どうせだったらもっとクサいほうがいいかな。私的には・・・・そう、ヒーローみたいな！」

「ヒーローってガラじゃないし」

「そんなことないよ。つばき君は・・・・今でも私のヒーローだから」

やよいの言葉につばきは空を仰ぎ見たまま反応がなくなる。そしてしばらくして――

―――

「・・・・俺、やっぱヒーロー向いてないかも」

「え？」

「ホラ、ヒーローってさ。敵のこと気配とかに敏感に察知して攻撃するじゃん？」

「まあ、まちまちだけどね。けどなんで？」

「これがその原因」

バタン！とまた大きな音を立てて開く。するとそこには先ほどやってきたみゆきと・・・・日野あかねの姿だった。

「あと、ヒーローは敵前逃亡なんてしない」

そう言って全速力で逃げ出すつばき。迫っていた二人の間を強行突破して出口まで駆け抜ける。

「待ってよつばき君！なんで逃げるの!?」
「おとなしく観念してウチの必殺スパイクを受けるんや！」
「そこのデンジャラス・バイオレンスバレー馬鹿のせいだこの野郎」
「ウチ女やし」
「ゴリラのマネ、うまいよな」
「狙い撃つで!?」
「そんなわけで黄瀬、今日は一緒に帰れそうにない。またあとでな」

そう言い残して嵐のごとく去っていく。その後ろ姿を見送りながら手を合わせ、

「・・・・生きてますように」

何故かあかねの餌食になるつばきの図が浮かんだ為そう天に向かった呟いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６

・・・・中々やるもんだな。得点盤に書かれた数字とこれまでの試合経過を見てそう思う。点を取っては取られの繰り返しでかなり接戦している。相手は結構な強豪校だというのにそれに喰らいついていってるのだからかなりチームワークと個々の実力ともに申し分ないと評価しても過剰評価にはなるまい。

だが、此方が目当ての選手はまだ出てすらいない。いや、レギュラーですらない。

頬杖をついてコートから外れたベンチを見る。幸い目線の高くなっているこの位置からはコート内に限らず全体の様子が見渡せるので身を動かすことなく視線のみの移動で彼女をとらえることができた。日野あかね――――試合開始からすでに数十分。まだ彼女はコートに一度も立っていない。

「日野さん、あんなに特訓したのに・・・・」

みゆきの言うこともわかるが、たくさん練習したからと言って試合に必ずしも出られるとは限らない。一流のスポーツ選手でもベンチ入りだけでその選手生涯を終える人

もいるのだから、学生の部活でもそれは例外ではない。

「スポーツの世界ってのはそういうもんだ。努力したからといって必ずしもそれが報われるなんてそれほど都合のいい世界でもないんだよ」

「でもそれじゃ日野さんがかわいそう・・・・」

気持ちはわからないでもないがな、と心中で呟きここから見える限りの彼女の表情を見る。拳を膝の上で握り歯を食いしばっているのがわかる。チームが点をとればそれは緩み、逆に取られればそれは力のこもったものへと変わる。状況とその時のビジョンによってコロコロ変わるその様から目線を動かせば、その先には得点盤が。差はわずかに2点。２３―２１とこちらが僅かに負けている。セットカウントは2対2で同点。この試合の結果がすべてを握っていた。

その時、顧問の教師が動いた。

「選手交代。三田に代わって、日野！」

ようやく呼ばれた名前。みなぎる闘志と鋭いまなざしを携え、あかねはコートに入れ

替わる。

「日野さん、がんば――――」
「静かにしろ。声援は邪魔だ」
「え～なんで？」

不満全開のみゆき。言いたい気持ちはわからないでもないが時として外野からの声はプレーミスに繋がることがある、今がちょうどその空気だとみゆきに話すと渋々納得し両手を組み合合わせて祈るようなポーズてコートという戦場に立ったオレンジ髪の少女を見つめる。ここからは一球一球が大事になってくる、そんな場面で呼ばれたということは、それほど彼女に期待がかかっているということの表れである。それは邪推などではなく、ここ最近の彼女の練習ぶりを見てきたつばきだからこそ思えることであり、確信だった。

自陣からサーブが撃たれる。ネットを越え相手がレシーブしたのを確認し、あかねはその白球を目で追う。ネット際にいる選手がトスを上げた。そしてその先には、アタッカーの選手。撃たれるボール。乾いた音が鳴り、次に聞こえたのはボールが肌に当った時に聞こえる鋭い音。それを聞いて、あかねの躰は思考するよりも早く動く。どこに行

けばいいのか、どうすればいいのかが考えるよりも躰に刷り込まれた動きが情景反射、無意識でもそれに倣って動いて次のアクションに備える。

ボールが天高くあがる。それがちょうど真上の太陽と重なり影を落とす。

――――今や！

足を曲げてバネのようにして跳躍。躰を僅かに後ろへとそり、利き腕である右手を振りかぶって構える。無駄な力はいらない。必要なのは、正確なコントロールと、パワー。それを・・・・叩き付けるようにして撃つ！

「おりゃあああああああああ！」

雄叫びと共にボールが撃たれる。小気味いい音と共に次に響いたのは、床を打ち付ける音と、横目でちらりと見えた審判の手。それが意味するのは――――得点。つまり、アタックの成功。着地すると同時に、咆哮を上げる。

「や、やった！やったよつばき君！」

「フン、当然だ。なんせ、この俺が特訓に付き合って――――って、抱き着くな暑苦しい

！」

だがまだ点差はある。これを埋めるまでは油断ならないと思っていたが、そんなつばきの予想をはるか上回る活躍を日野あかねという少女は見せた。彼女がコートに立ってからわずか数分の間に逆転しマッチポイントで点差を見事にひっくり返したのだ。それに自分の事のように喜ぶみゆきと、隠れてキャンディも同様にはしゃぐ。

努力は裏切らない――――今はくだらないと吐き捨てたその言葉の本当の意味と結果を目の当たりにしてつばきは少しだけ羨ましくおもった。

◇

「くだらねぇ・・・・」

空に浮かびながらそう憎しみを籠めて言う。眼下に見えるは笑顔を浮かべるあのにっくき二人の姿。自分のプライドをズタズタにしたあの戦士達の笑う姿だ。それがあの時の光景をウルフルンの怒りを加速させる。

「あの時は油断したが今日は違げェ。あのガキ共に目にもの見せてやるぜ・・・・!」

持ってきた本を広げる。さあ、これで準備は整った。空いている手の中には使い古されたような黒い絵の具のチューブを持ちそれを力いっぱい握る。チューブが弾け、手中にぬめりとした感触を感じたウルフルンはまるでの呪うかのように口上を高らかに詠唱する。

「世界よ、最悪の結末。バッドエンドに染まれ!白紙の未来を、黒く塗りつぶすのだ!」

こんな世界、ブチ壊してやる。あいつ等も、この空も、音も何もかも、全部を真っ黒にそめてその空間は通常とは逸脱した空間へと包んでいく。バッドエンド空間――――やっぱりこっちは居心地がいい。彼方此方からあがるバッドエナジーを見ながら本を掲げる。それは自らの主君である存在の糧となるものだ。ああ、早くあの方が作り出

す世界に帰りたい。こんなイヤなものばかりがあふれる世界など、一秒でもいたくはない。

だからとっとと邪魔者を片付けて帰ろう。後のことは、それからでもいい。ウルフルンは此方を睨み付ける者たちを見下した。

◇

〔つばき、バッドエンド空間だ！〕

「彼奴が近くにいるクル・・・・」

ゲキリュウケンが警告を、キャンディはおびえるようにしてみゆきの手におさまる。聞こえてきた笑い声と気配に視線を動かせば、ゆっくりと降下してくるウルフルンの姿が。

「彼奴、生きてたのか…！」

「忘れもしねェぜリュウケンドー・・・・テメーに受けた屈辱、今日はそれを倍返しだ！出でよアカンベー！」

取り出した赤鼻を掲げれば、現れたのはバレーボールを媒体としたアカンベーだ。試合をめちゃくちゃにした挙句、あかねの大事な試合を邪魔した相手に、さすがのみゆきの怒りも頂点に達する。鋭く睨む視線をウルフルンへと向け、鞄に下げていたパクトを握る。

「行くよ、つばき君」

「言われなくても。ゲキリュウケン！」

つばきがゲキリュウケンを戦闘形態へと変化させる。みゆきデコルを、つばきは魔弾キーを手にそれぞれ叫ぶ。

「リュウケンキー、発動！」

〔チェンジ、リュウケンドー〕

「ゲキリュウ変身！」

〔ｒｅａｄｙ？〕
「プリキュア、スマイルチャージ！」
〔ＧＯ！ｌｅｔ，ｓ　ＧＯ　ハッピー！〕

二色の光に包まれて姿を現す二人の戦士。

「キラキラ輝く未来の光、キュアハッピー！」
『リュウケンドー、来迅！』

憎い。奴らが憎い。そのムカつく面を恐怖と絶望で塗りつぶしたい。ウルフルンの念がアカンベーの戦闘力へと変換され、激突する。跳躍してのキックと剣をバックステップで躱し、巨大な拳を振り下ろしてくる。それを左右に跳んで躱した直後、着地して時間差をつけてのアタックでアカンベーに迫る。が、アカンベーは自身の能力でボールを作り出してそれを投げつけることによりハッピーを、そしてリュウケンドーを弾く。叫びと共に地面に叩き付けられるハッピー、なんとかゲキリュウケンでボールを切り裂いたリュウケンドーはそんなハッピーを気にかけて駆け寄る。

『大丈夫か!?』
「な、なんとか・・・・!」

起き上がるハッピーを背に庇いながら剣を構える。

「あの時はちと油断しが今回はそうはいかねェぜ」
『チッ・・・・なら!』

魔弾切りで、とホルダーに手を置くリュウケンドーだがその背後でなにやら吠えるハッピーに振り向く。スマイルパクトにエネルギーが収束されていくのを見て危険を感じて慌ててしゃがむ。

「プリキュア・ハッピーシャワー!」

リュウケンドーが身を屈めた直後に放たれるピンクの光。頭上を翳めて飛んでいくそのエネルギーの奔流はまさかアカンベーをとらえることなく虚空を通過して虚しく消える。

「そうおんなじ手を何度も喰らうかバーカ！」
「しまった・・・・！」
『アホか!?俺まで巻き込む気かおまえは!?』
「今は喧嘩してる場合じゃないクル！」
『やかましい！大体おまえは毎回毎回――――！』

　気配に気が付いてリュウケンドーはハッピーを突き飛ばす。直後、巨大な手が通過してリュウケンドーを攫った。その時ゲキリュウケンは手を離れてしまい地面に落ちる。ギチギチと締め上げるアカンベー。巨大で強固な手はビクともしない。

「こいつは傑作だぜ！足を引っ張った挙句仲間割れたァ実に愉快だ！」
『クソッタレが・・・・！』
〔リュウケンドー！〕

　さらに手に力を込めるアカンベー。いたぶることを楽しむウルフルンにハッピーは後悔の念にさいなまれながらも地面に落ちたゲキリュウケンを握る。

〔無茶だキュアハッピー。今のきみではやられるだけだ！〕
「リュウケンドーは、私のせいで苦しんでるの。だったら、私が助けなくっちゃ・・・・！」

そうは言っても度重なるダメージとハッピーシャワーの疲労で肩で息をしているような状態だ。このまま向かっていってもたどり着くことなどできはしない。それどころか自分を満足に振るうことすらできないだろう。だが、それでも彼女は闘志を失ってなどいなかった。失敗を取り返す。助けたい。その一心で走り出す。

「はあああああああああああああッ！」

力強く大地を蹴って跳躍。重力に従って落ちていく速度を利用しながらハッピーはゲキリュウケンを振り下ろした。いや、叩き付けた、という方が正しいか。強烈な打撃を受けたアカンベーはリュウケンドーを手放してしまい衝撃でよろよろと苦痛に顔を歪めながら2、3歩ほど下がる。せっかくのチャンスになんてことをとウルフルンが怒鳴り散らす。

「ごめんなさい、大丈夫？」
『ああ、それよりも無茶すんな。今度は二人でやるぞ』
「うん！」
「チ、もう仲直りしやがった。・・・・でもまあ、いいか。バッドエナジーも採取したし、そんな状態じゃ俺たちに勝てるはずもないしな」

余裕を見せ高笑いを上げるウルフルン。それにハッピーは改めて周囲の参上を見回す。戦闘の影響で荒らされ破壊されたコートとえぐれた地面。そして何より、今まで必死に頑張ってきた彼女の大事な日を妨害したこと。それが許せなくて、相手を睨む。

「今日は、日野さんにとって・・・・ううん、ここにいる人達にとって大事な日なの。この日の為に、みんながどれほど努力してきたか。なのに、それなのに・・・・！」
「ハ、努力？そんなことしても無駄無駄。所詮選ばれた奴しかできねーならやったって意味ねーだろ。バカかおまえ？」

真っ向から否定するウルフルンにそれもそうだなと納得するリュウケンドー。自分

も同意見だ。努力したからといって、それがすべて報われるわけではない。だからこそ勝負の世界、スポーツの世界というのは成り立っているんだとも。それが現実であり、綺麗ごとはただ傷口に塩をぬるようなものだということも理解している。

ただ、同時にでも、と思う自分もいるわけで。だからこそ、ウルフルンの言っていることに１００％納得できなかった。故に言い返す。

『そうだな。此奴はバカだ。だからそんなこと信じて努力する。そしてそれをするやつを応援する。そんなことしても、ただ虚しいだけなのにな』

「なんだ、意外と話が分かるじゃねーか」

「リュウケンドー、何を言ってるクル・・・・？」

『何って、俺も彼奴と同意見だからだよ』

「そんな・・・・!?」

「ウルッフッフッフ！こりゃァいい！正義の味方がトンだ思考の持ち主だったぜ！」

『――――でも、？無駄だとは思はない？』

「・・・・・あ？」

『努力したところで報われる奴なんてほんの一握りだ。それこそ才能を持った奴になんかは敵わない。けどな。日野はそれをわかっててやってるんだ。努力しても、それでも

越えられない壁があるのをわかってる。だからこそ此奴は努力してきたんだ』

「テメェ、さっきからなに言ってやがる!?無意味だってわかってんなら、じゃあなんで努力なんてすんだよ!」

ウルフルンの言葉にチッチッチと舌をならしながら指を左右にふる。

『だからだよ。結果がたとえ悪くても、努力することを決して諦めない。それに結果なんてモンは後からついてくるもんだ。重要なのは、努力したかどうか、だ。無意味だったかどうかは自分の意思一つで決まる。此奴はそれをずっと持ち続けてきた。そしてそれが今日、ようやく花開こうとしてる。それを邪魔する権利は、どこの誰にも…ありはしない!』

「この野郎・・・・ッ、やっちまえアカンベー!」

バレーボールを掲げるアカンベー。動けないハッピーに代わりその間に立つリュウケンドー。これを喰らえばひとたまりもない、そんな攻撃が――――放たれることはなかった。それはアカンベーに当った、その体長からしてみれば小さな球によるものだっ

た。集中の削がれたアカンベーはそれをやった者を見下ろす。

「・・・・ウチの友達に、なにしてくれてんねん！」

日野あかね、１４歳。努力することを諦めない熱血少女が恐怖に耐えながら放った一球によるものだった。

Episode7

ありえない。突如起きた驚愕の出来事にウルフルンは驚きを隠す余裕もなく眼前にいる少女を凝視する。先ほどまで絶望に沈み、バッドエナジーを発していた人間が、今、目の前でその絶望から抜け出し此方に向かって怒声を飛ばしてきた。あの二人のように、最初からこの空間で活動しているのであればまだわかる。前例もあったし、うなづける。理解できる。だが此奴はどうだ?最初はバッドエナジーを放出し項垂れていた筈だ。だが今現実にこうしてアカンベーに対しボールをぶつけるという行為をしている。

ありえない。もう何度目かの驚愕をようやく脳内で整理した後、ウルフルンはリュウケンドーを見る。まさか奴の言葉で絶望から抜け出たとでも言うのか。そんな馬鹿な話があってたまるかと今一度あかねを見て、リュウケンドーに対し言葉を発する。

「貴様ァ、いったい彼奴になにをしたァ!?」

『何を?違うな。日野は自分の意思で絶望から戻ってきた。それも、友達を助けたい、なんて単純な理由でな。お前が心底嫌ってるものが、お前が作り出した絶望を打ち破った

んだ』

たったそれだけ。それだけで、そんなことでひっくり返すなど聞いたことも見たこともない。

これが、人間の持つ？希望？だとでも言うのか。だとしたら、コイツは――――

「星空さんとそいつはな。ウチの我儘に最後まで付き合うてくれたんや。自分の時間削って、つばきなんか痣も作りながら相手してくれた・・・・それで、ようやく立てたんや。念願の、あとたった数分かもしれんけど、それでもめっちゃ嬉しかった。二人のおかげで、ここまでやっと来れたんや。そんな二人を――――友達を！傷つける奴は、絶対に許さへんで！」

何かが、弾けた。日野あかねという少女の中でなにかが変わった。それを感じると同時にオレンジ色の光と共に出てくる六角形の物。それを握れば手の中で光り輝き熱を帯びる。オレンジ色に輝くそれはまるで・・・・

『魔弾キー・・・・？』

「太陽燦々、熱血パワー。キュアサニー！」

◇

「な、なんじゃこりゃ～!?」

　言われるがまま、なすがままにした初めての変身は予想に反してかなり違ていた。普通、変身といえばつばきのようなヒーローものをイメージするだろう。かっこいい鎧や武器、そして勇ましく敵と戦う。それが自分の持つヒーローというものへの印象だ。だがこれはどうだ。どちらかと言われればみゆきの方と言える。オレンジの動きやすい服に髪型は団子になり、毛色も明るくなっている。それに何だか不思議と躰の奥底から力が湧いてくるような感覚がある。これが変身、これが――――プリキュアってことな

んだろうか。

だが、それにしても。

「なんやのさっきの。口が勝手に動いて、太陽燦々てなに!?てか、このひらっひらとか髪型とかどういう仕組みなん!?」

敵前だというのにこのパニックぶり。あたりまえだがこのリアクションがなんともわかるハッピーからしてみればなんとなく懐かしさも感じられるわけで「ああ、やっぱそうなるよね～」なんてしみじみ呟く。突然服や髪型まで一瞬の内に変わったのだ。無理もあるまい。しかし、今は戦闘中でしかもピンチ。そろそろ戻ってきてもらわなければとリュウケンドーはパニックに陥っているサニーの背中を軽く叩く。それにより正気にもどったサニーが此方を見て再度驚く。

『いい加減慣れろ。戦闘中だ』

「あ、せやった…。あの狼、一回ぶん殴らんと気が済まへん!」

その意気だ、と笑うと色がオレンジに変わった魔弾キーを見つめる。エンブレムが表

すのは――――炎。

『・・・・行くぞ、キュアサニー』

「おっしゃ！」

パン！と拳を打ち合わせ、駆けだすサニー。それを見てからリュウケンドーは新たに現れた魔弾キーをゲキリュウケンに装填する。

『ファイヤーキー、発動！』

〔チェンジ。ファイヤーリュウケンドー〕

『火炎武装！』

リュウケンドーが炎に包まれ、燃え上がる。しかし本当に燃えているのではなく、溢れだした魔力が炎となって鎧にまとわりつき、それにより炎に包まれているように見えるだけだ。リュウケンドーはそれを形に制御し、鎧に炎の力を加えてモノにする。名の通り、火炎を武装としたのだ。

『ファイヤーリュウケンドー、来迅！』
「二人の力でアカンベーを浄化するクル！」
『タイミングを合わせろよ、サニー！』
「え、ちょ、タイミングて!?」
『こういう展開は合体技って決まってんだよ。ホラ、やるぞ!?』

　此方のこともお構いなしに問答無用で事を進めてるリュウケンドー。何がくるのかと構えるアカンベーとウルフルンだが、すでに何が起ころうとしているのかは場の空気を読んで悟っていた。これは、もう勝機はない、と。故にウルフルンは今自分ができる最善の選択と行動にでることとする。そう、逃走だ。いくら幹部といえど命は大事。こういう時は撤退して次の作戦でも考えるとしよう。世の中切り替えが大事だ、と無理やり部下を置いて自分だけ逃げるという行為を正当化し、その場からテレポートで消えるウルフルン。それに気が付いたアカンベーだったが時すでに遅し。相手はもう発動体勢に入っていた。

「プリキュア・サニーファイヤー！」

イメージは単純。炎の球をバレーボールのアタックの要領で打ち出す。そしてそれをゲキリュウケンを掲げたリュウケンドーが受け止め、魔弾キーを装填する。

『プリキュア・魔弾龍・魔弾剣士。三つの力が今一つに！三位一体火炎斬り！』

炎を纏ったゲキリュウケンを手に跳び、そして振り下ろす。アカンベーが炎で焼かれ、浄化されていくのを背にしながらゲキリュウケンの刃が纏っていた炎も消える。

『闇に抱かれて眠れ・・・・』

断末魔を残し消えるアカンベー。浄化された赤鼻からは媒体となったいたデコルが落ちてきてそれをキャッチするキュアサニー。深く溜息をついて、ハッピーが一言。

「これで、一件落着・・・・かな」

◇

その後、試合は再開。元に戻った人たちはやはり前後の記憶がなく、全員が白昼夢を見ていたというなんとも呆気ないことで済まされあやふやとなり何事もなかったかのように試合は続行。結局負けてはしまったものの、あかねの表情にはやりきったあとの達成感と、どこか嬉しそうな色が見て取れた。

夕暮れの帰り道で、土手の上を歩く。他愛のない話で盛り上がる中、ふとあかねが何か思いつめた顔で立ち止まる。俯き、何かを考えるかのような姿にみゆきと二人して顔を見合わせ首をかしげる。やはり、さっきの戦闘のことが彼女に要らぬ恐怖心を植え付けてしまっただろうか。だとしたらそれはすまなことをしてしまったと謝ろうと口を開くみゆき。しかし、それはいらぬ心配だったと直後判明する。

「あの！この前の事・・・プリキュアのことなんやけど、ウチ、やっぱりやってもええ

かな・・・・?」

遠慮がちに言うあかね。体操着の裾をぎゅっとつまんで照れながらも言うその姿に普段とは違ったギャップを見て少しドキッとするつばきを余所に、みゆきはじけたような笑顔が彼女の問いに答えを出す。

「もちろん!これからよろしくね、あかねちゃん!」
「あかねちゃん?」
「あ、ごめんなさい。嫌だった…?」
「んなわけないやん。むしろ大歓迎や!これからもよろしゅうな、みゆき!」
「ちょ、おまえな。プリキュアを続けるってことがどういう意味か――――」
「わかってる。でも、決めたことやかさかい。ちゃんと最後まで付き合うて」

溜息。これにはもう何を言っても無駄だと判断したつばきはどうしようもないと息をついたあと、踵を返す。

「…なにしてんだ。行くぞ、みゆき、?あかね?」

「…素直じゃないね」
「せやろ？」

こうして、三人にとって長い一日が幕を閉じた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８

「おっはよ～つばき君！」
「おはようさん、つばき」
「おう」

朝の登校でにぎわう通学路。前方でテンション高く――――約一名を除いて――――はしゃぐクラスメイト、一人は最近転校してきた星空みゆき。もう一人は一年から同じクラスの日野あかね。そして――――

「おす、黄瀬」

幼馴染の鳴神つばき。小さな頃からずっと一緒だった男の子、けれどいつの間にか二人の距離はこんなにも遠い。物理的なものではない、主に精神的なものであり、物理的な方はこんなにも簡単に埋まる。足を動かして、いつも通りに彼の隣に並ぶ。多少強引

になるようにしてみゆきとつばきの間に入る。我ながら大胆な行動にでたなと思うが、やってしまったものは仕方がないのでこのまま歩くことにする。強引、というよりはもう縄張りを荒らされるのがイヤな動物のそれに近いかもしれないとさえ思う。

「おはようつばき君」

それでもこうやって挨拶したりお喋りしたりできるだけでも嬉しかったりする。こうでもしないと引っ込み思案な自分は勇気がだせないのだから参ったものだ。しかし、この行動がかえって裏目に出てしまう。

「なんややよい。みゆきにヤキモチか？」
「ふぇ？」
「ヤキモチ？」
「ち、ちちちち、違うってば！」

慌てて否定するも今更遅い。あかねがこの場にいたこと時点でこうなることは決まっていたようなものだ。にぎやかし役でもある彼女がこんなオイシイ場面に出くわ

して食いつかないわけがない。完全に失態だとおもいっつあかねの言葉を否定しておく。まぁ、実際のところあまり間違ってないのが不満だが。それでも否定しておかないと後でこじれても嫌だと上手く回らない舌と口で弁解する。

「これは、その、あの、えっと・・・・」

だが言葉が出てくるはずもなく。弁解しようとすればするほど空回りしていく。もういっそ泣いてしまおうか、なんて考え始めるとそれを見かねたつばきがあかねの脳天にチョップをいれた。「なにすんねんっ」とあかね。

「朝っぱらから面倒事おこすな。それと、一応黄瀬は俺の幼馴染。気がしれた相手ならこれぐらいのスキンシップはあっても不思議じゃないだろ？無理やり発展させんな」

「チェ、いいネタ仕入れた思うたのに」

スキャンダルだ！そう思ったあかねだがつばきに根底から崩されて論破されてしまう。つまらないと口をとがらせるあかねにさらにもう一発入れてやろうかと手刀を構えるとみゆきが申し訳なさそうに声を上げた。

「二人って、どういう関係？」
「やよいとつばきは幼馴染でな？小学校よりも前からの付き合いらしいで」
「まあ親同士が同級生だったってのもあってな。よく遊んだりもした。最近じゃ、学校で会うぐらいでそういうのは無くなったけど」

所詮幼馴染なんてそういうモンだ、と言い終えてからあくびを一つ。相変わらず朝は弱いんだなとその光景をみて小さく笑う。するとそれに気づきたのかこちらに視線を向けてきたので慌ててなんでもない風を装った。

◇

「校内清掃のポスター？」
「ホンマに先生の話聞いてなかったんやな」

「だって朝眠いし」
「わからんでもないけどな」

でも寝るのはどうかと思う、とみゆき。仕方がないだろとはつばきだ。だがいつまでたっても話が進まないのでとりあえず強引にあかねが話の先導を切る。

「これから一週間、生徒会で決めた目標なんやて。で、それを宣伝するために生徒から宣伝ポスターを募集するらしいで?」
「生徒会も真面目だこと・・・・で、ウチのクラスから誰か出るのか?」

話しながらあくびをして心底眠そうに問う。そういえばここのところプリキュアやらなにやらでいろいろと休まる暇がなかったなとこの眠けの主な原因について考える。
「はいは〜い!」とみゆきがここぞとばかりに元気に挙手してくるのでこれは無視するにしてもこう主張が激しいと無理だと判断してとりあえず発言許可だけを出しておく。

「はい、星空君」
「はいっ!私、黄瀬さんがいいと思います!」

「ってな感じで推薦したらものの見事に決定して、当事者はというと・・・・」

あかねの指さす方を見る。がっくりとうなだれるその姿はテストでとってはいけない点を取った時の自分とよく似ているな、とその時の自分の姿を照らし合わせる。背中のうな垂れ方など完全に一致じゃないかとさすが幼馴染、よく見ていると心の中で褒める。・・・・何故だろう、哀しくなってきたと考えるのをやめるて話を元に戻す。

「なるほどな。よし、星空君」
「はい、何でしょうか先生！」
「お前、後で屋上な」
「それってもしかして・・・・」
「そう、よくヤンキーが気に食わない奴に言うアレだ」
「そんなぁ・・・・」

まあ、何はともあれやってしまったものは仕方がない。こうなってしまったらやるしか道はないだろうと席を立ちやよいの隣の椅子に腰かけるとこう言った。

「ドンマイ」
「やっぱりつばき君っていじわるだよね」
失敬な。そう言葉にすることなく顔で不満を表現した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９

「というわけで絵のモデルになってほしいの！」
「よろこんで！」
「モデル、やるクル！」
「うん、ちょっと冷静になろうか」

　確かに屋上とは言った。しかしこんな展開になるとは誰が予想できただろうか。おかしい。色々といちゃいけない、というよりは人前には絶対にでちゃいけない人外の生物が一匹しれっと紛れ込んでいる。それどころかいつの間にか当たり前になっているこの状況がコワい。
　一旦整理しよう。

「まず絵のモデルになるってのはわかった。問題はそこからだ。俺たちは普通に昼飯を食ってた。そして今は放課後。人気のないこの時間帯に屋上で絵を描くってのもわかった。だが何故キャンディが自然といる。お前人外だろ、見かけ狸だろ。ぬぐるみの

振りしとけっつの」
「キャンディは狸じゃないクル！」
「そうだよつばき君。いじわるしちゃダメだよ？」
「黙れ脳内万年花畑。これはそういう問題じゃない」

あかねでさえツッコミが追いつかないから放棄し始めたというのにこれで自分まで放り投げたら収集が付かなくなるどころの騒ぎでは無くなる。えっと、たしかゲシュタルト崩壊・・・だったか。疎い頭でそんなことを考えながらもつばきはキャンディをつかみ上げて自分の目の前にまで持ってくる。

「あんな、この世界での普通ではお前は本来ぬいぐるみ的なものとして見られるんだ。動くのは電池の入った、触れば機械的な無骨な冷たさがあるおもちゃだけ。でもお前は生きて、こうして俺たちの質疑応答にも対応できる。まあできる度合いはあるがな。ということは、だ。異世界から、しかも妖精がいて、しかも対会話していてなおかつこの状況を誰かに見られたらどうする？テレビカメラで全国中継されてプリキュア探しどころじゃ――――あ」
「あんた今思いっきり言うてもうてるやん」

「・・・とにかくだ。むやみに人前に出てくるな。それから黄瀬。もう忘れろなんて言わねー。でもこのことは――――」
「うん、秘密、だよね。わかってる」

本当に大丈夫なんだろうか。不安しかないが、もうこれ以上はどうしようもないと溜息をつく。なんだかどっとでてきた疲れを少しでも取り除くべくポケットからアイマスクを取り出して踵を返す。どこに行くのかと問われればベンチで昼寝と返す。時刻は午後2時。昼寝、というには微妙な時間帯ではあるがそれにツッコミをいれることなくつばき同様あいよ、と手を上げて返す。終わったら起こしてくれという頼みを聞き入れたあかねはポージングに悩むやよいに向き直った。

◇

鬼、という名詞を出されてどんな姿を連想するだろうか。たいていの人は躰は大柄で肌は赤く、口は牙が生えて吊り上がり、それはそれは恐ろしい顔をしている。虎柄の黄

色と黒の縞々のパンツをはき、金棒をもっていてそれをブンブンと振り回し暴れる、そんなところだろうか。そんなテンプレのような鬼、まさか本当にいるはずがないと思うのが普通だが、それは地球の、人間たちのみに当てはまる普通であり、ここバッドエンド王国ではその普通が異常となり、そして異常が普通になっている。ここはそんな異常な者達が暮らす世界、メルヘンランドが希望であふれているのであればここはさしずめ絶望であふれた世界といったところだろう。名は体を表すとはうまいことばを作った人間もいたもんだ、と鬼――――アカオーニは思う。

ウルフルンが連敗を記している。その報告は自分の耳にも届いている。いや、いつも見てるのだから戦果がどうだったかくらいは自分でもわかっていた。ああ、此奴今日もヘタこいたなと。だが自分はそんなヘマはしない。サクッといってサクッと邪魔者共を消し去ってサクッとバッドエナジーを取ってくる。豪快に、荒々しく、だが決めるところはちゃんと決める。そうでなくては男らしいとはいえない。だからあの狼はまったくもってダメダメだと評価づけて金棒を軽々と担ぎ上げて歩を進める。目指すは人間の世界。邪魔者のいる、あの不愉快極まりない世界だ。

「さて、今回は俺様があの出来損ないに代わってバッドエナジーを取りに行くかオニ！」

鬼が、人間の世界へと降り立った。

◇

かれこれ一時間。指定された道具とポーズをとってからそれだけの時間が経過していた。最初は乗り気だったキャンディとみゆきだがやがてその勢いはみるみる内に削がれていきいまでは退屈だとさえ思う。時々疲れたからと言って体勢えお変えようとするとやよいから想像もつかない程の激が飛んでくるのでそれもままならない。後ろの方で寝ているつばきを心底羨ましいと思いつつみゆきはその苦痛にただ涙をこらえて耐えるしかないでいた。

そんな中、ふとあかねが口を開く。

「そういえば、つばきってやよいのこといつから黄瀬って苗字で呼ぶようになったん？なんか前は名前やった気すんねんけど」

「・・・小学校３年の時まではずっと名前だったんだ。でもある日を境にちょっと疎遠になっちゃって、それ以来かな。中学校に上がってからはあかねちゃんも知ってる通り。あの時はたまに昔からの癖なのかたまに名前で呼んでくれてたりしたんだけど、いつの間にか苗字で呼ばれるのが固定されちゃって」

そうか、だから幼馴染って聞いてもそうは見えなかったのか。動けない、喋れないという二段縛りに見舞われつつみゆきは心の中で合点がいったように頷く。この二人に感じてた不思議な違和感はそういう事だったのかと呟き、ふとつばきを見た。

（そういえば、黄瀬さんの事話題に出すとすぐ反応してたっけ）

これまでの会話のなかでいくつかの情景を思い浮かべながらそうだったかなと思考する。まあこんなこと考えたからと言ってどうにかなるわけでもないが。と、思考を切ろうとしたときに何かが閃いたみゆきは突然「そうだ！」と大声を上げる。びっくりし

たあかねはついていた頬杖を崩し、やよいはバキン、と鉛筆の芯を折る。つばきに至ってはベンチから落ちて何事かと辺りをきょろきょろ見回す始末。それをやった当の本人はそんなことなど眼中にないと言わんばかりにやよいの手をとり、こういう。

「ねえ、私たちと一緒にプリキュアやらない？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０

我ながら失言だったと思う。そう気づいた時にはもう遅かった。ゾクっとした悪寒に振り向けば此方を睨んでくる相手と目が合う。その目力は半端ないものあがり、今まで見てきたどの悪役よりも鋭い瞳で自分を映していた。その眼力に何も言えずに黙っていると、つばきが口を開いた。

「黄瀬、今のは忘れろ。それからみゆき、ちょっと来い」

嫌だとは言わせない。そんな意味のこもった目で睨まれればまず反論などあろうはずがないので仕方なく手を引かれて屋上を出ていく。扉の敷居を跨ぎ、ドアが閉まったところで立ち止まり、壁に押し付けられた。いわゆる、壁ドンというやつである。これが別のシチュエーションであるなら今頃頭から湯気でも出してパニックになっていたことだろう。なんせ男子とはあまり免疫のないみゆきだ。こういうことも初めてだし、もちろん男子とこんなに長い時間一緒にいたのも初めて。

が、今回はそんな悠長なことなど言ってる場合ではない。目の前の相手は怒り心頭。今にも胸倉をつかまれそうな勢いの感じさせる彼の躰はこみ上げてくるものを抑え込もうと僅かに震えていた。

「どういうつもりだ」

抑揚のない声が耳に聞こえる。それが軽く恐怖心を煽ったことでビクリと躰をこわばらせる。

「どういうって、黄瀬さんピッタリだと思うんだ。かわいいし、プリキュアの衣装とか着たらきっと似合うよ」

「ああ、だろうな」と呟くもそれすら抑揚がない。あるのは怒りと、自分を責め立てる念。俯いたまま、壁へと押し付ける手が拳を握る。

「・・・・それだけか?」

「う、うん・・・・」

「前にも言ったはずだ。これは遊びじゃない、ましてやリセットの効くゲームでもないんだよ。負ければ死ぬ、命がけの戦いなんだ。そんな危険なことに、ただ衣装が似合うから、かわいいからという理由だけで彼奴に声をかけたのなら、俺はお前を許さない」

上げた顔、そこにあった瞳から感じられたのは、明確な拒絶。発言そのものだけでなく、星空みゆきという少女そのものを拒否する目だ。こんな瞳に今まで出会ったことのないみゆきはただただその瞳に映る自分を見てようやく自分がどういう表情をして、どういう状況に置かれているのかを知る。この話題――――というよりは、彼女に関してのプリキュアはの勧誘は彼の逆鱗に触れてしまったらしい。

「まだ軽い気持ちでいるのなら・・・・今すぐプリキュアをやめろ」

「か、軽くなんかないもん！私だってちゃんと考えて――――」

「考えて!?それで出たのがあの言葉か!?だとしたらトンだオフザケだな。それで誘って、彼奴が仮にその誘いを受けたとして。もし黄瀬が変身できなくてその結果死ぬようなことになったらお前は責任とれんのかよ、えぇ!?」

一気にまくし立てるつばき。相手が女子だろうと関係ないような感じはなんとも彼らしいといえばらしいのだが、これを受けているみゆきからしてみればたまったもので

はない。あまりにもの迫力と感情に恐怖すら感じるほどで、小さく震えだす。そんなみゆきを、半分涙目で見る彼女を見てハッとなるも今更もう遅い。やってしまったことへの引っ込みがつかなくなったつばきはどうしていいかわからずにそれまでの流れを紡ぐようにしてみゆきから顔をそむける。

――――ホントは、こんな筈じゃなかったのに。

そう心中で呟いてから手を壁から離してみゆきを解放する。気まずい空気が流れる中、扉を開く音が聞こえてそちらを見る。恐る恐る此方を見てくるのはやよいだった。それを見てまた気まずくなって顔を伏せる。

「・・・ワルい、今日はもう帰るわ」

逃げるようにして階段を降りていくつばきのあとをおいかけるようにして、やよいも階段を下る。みゆきとすれ違い様、「ごめんね、ワケはまた後で話すから、あまた明日!」と言い残し降りていく。そんな現場をもろに見てしまったあかねは頭にキャンディを乗せて思う。

いよいよ、面倒なことになったなぁ、と。

Episode11

やっちまった、と溜息。我ながら単純だと思うと同時にまた溜息。ただちょっと注意するはずのつもりがこれなのだから世話はない。

「そんなに溜息つくほど後悔してるんなら早く謝ればいいのに」

それができたらこうも悩んでない、そういう視線を妹に返せばそれを受け「はいはい」とそっけなくあしらわれる。エプロンを付け、夕食の支度にかかるさくらに今回の事を打ち明けてみれば「それはご愁傷様」とこれまたあっけなく切られてしまった。相方に言っても触らぬ神に祟りなしといった感じで取り繕うとはしない。八方ふさがりだと頭を抱えて再びソファにだれる。

「そもそもお兄はやよいさんのことになると短気すぎ。もうちょっとクールになったら？いつも言ってるじゃないの。熱くなった時こそ、冷静さが最大の友って」

「それはあのジジイの教えだっての。それに、俺だってこうなりたくてなったわけじゃ・・・・」

今更何を、と呟いて鍋の中を確認し蓋をする。コトコトと煮込まれている音を聞きながら工程は順調だと満足そうに頷く。冷蔵庫からキャベツを取り出し、まな板の上に乗せ、得意げに包丁を握って鮮やかな手さばきで切っていく。リズミカルな音を聞けば、それだけでさくらの家事スキルの高さがうかがえるほどに板についてきた。最近では妹、というよりお母さんという言葉が似合うようになってきてしまっているがそこはまあ、気にしない方向で行こう。

それよりも。

「俺ってこんなだったっけ・・・・?」

はて、いつからこうだったかと少し過去へとさかのぼってみることにして、つばきは目を閉じた。

◇

「ってことがあったの」
「なるほどね・・・・」

夕食を食べながら家族二人の団欒。テーブルに置かれたサバの味噌煮に箸を付け、身をほぐして口へと含む。目の前の母は「う～ん」と考え、結論に至ったのか苦笑した。

「つばき君、やよいのことが心配なのよ。ホラ、やよいって少しドジっ子だから」
「お母さん、それフォローになってないよ・・・・」

せめてもっとマシな言葉はなかったのかと言いたくなるが、まあこの際それはスルーしよう。

「心配、か・・・・」

小学生の時。自分はあまり人当りがいいとは言いがたかった。というのも、父が死んだあとはかなりふさぎ込んでいた節があったためである。身近な人の、しかも家族で父親の突然の死ともなれば幼いながらもその出来事の大きさやショックは計り知れないものだったと今でも思い出せる。

あまり思い出したくはないが。

その頃から――――いや、正確にはもっと前からではあったが。クラスでそういう子が一人でもいれば、まず恰好の的となる。もちろん、虐めだ。今考えてみれば些細なことだったが、当時の自分からしてみればかなりのダメージだったような気がする。言葉の暴力というのは実際の暴力とは違い目に見えない分かなりのダメージを精神に与える。それが時には人の命を奪う事にもつながると理解したのは、それから数年先ではあるが、それはどうでもいい。重要なのは、ここなのだ。

やよいが虐めを受けていたという事実。父が幼くして死に、友人もさほどいたわけではないやよい。当然、孤立し行き場をなくす。まだ善悪の区別がつききらない子供にとっては珍しいものを見るめで見られ、やがてそれが虐めへと変異していった。最初は内緒話、次は陰口。そして極めつけは言葉による精神攻撃。正直な話、何度も母に言おうか悩んだ。でも、それをしなかったのは母の、あんなに優しい笑顔の絶えなかった母

が泣いた顔を見ていたためである。自分の前ではいつも笑っていて、寝静まったころ、母は父の写真を見ながら静かに泣いていたのを覚えている。

困らせてはいけない。我慢しなくちゃ。辛いのは、自分だけじゃない。そう思う内、いつの間にか自分の中でそれを押し殺すようになっていった。

その頃だった。自分が、？ヒーロー？と出逢ったのは。

クラスでたまたま一緒だった男の子。どこにでもいそうな普通の男の子。でも、その時のやよいには彼がとてもかっこよく、そして輝いて見えた。

――――おい。大丈夫か？

差し出された不器用な手。あの時と変わらぬ不器用さは今も健在だ。

それから、二人でよく一緒にいるようになった。と言っても、自分から一方的に一緒にいるようにしただけだった気もするが。ああ、そうだ。結構強引に一緒にいたかもしれないといまになって思い出す。

こうして思い出してみれば、これが二人の始まりだった。誰も知らない、自分と彼だけの始まりの時。そして――――彼の、拭えない傷の始まり。

・・・・やめておこう。首を振って意識を現実へと戻す。今は食事の時間だと手を動

かす。

「さっきからニヤニヤしたり辛そうな顔したり・・・・もしかして、つばき君かな？」

言い当てられ、口に含んだものを吐きそうになりグッと堪えて飲み込む。咀嚼は充分だったのでなんとか飲み込めたやよいはすぐさま抗議にでる。

「ち、違うよ！私はただ、校内清掃のポスターをどうしようかなって考えてただけで・・・・」

「嘘。やよいがそういう顔するときは絶対つばき君が関わってるもの。それに、最近は頻度も増してきてるしね」

茹蛸――――今の自分を表現する言葉があるとすればこの言葉がぴったりだと思う。恥ずかしさのあまり、口をパクパクとさせながらやよいは言葉を探すがイタズラげに笑む母の姿を見て、ああ無理だ、と理解する。どう言い返したところで、この人には全てお見通しなんだろうなと諦め俯く。それをみて「やぱりね」と呟いたあたり想定済みだったらしい。

「で、話は戻るけど。そのみゆきちゃん?とつばき君に仲直りしてほしいんでしょ?」
「うん。でもどうしたらいいか・・・・」
「そうね・・・・こればっかりは本人たちの問題だから、どうしようもないかな」

苦笑する母。結果、どうにもしようがないということだけがよくわかったやよいであった。

◇

「それはマズいことをしたね」
「そうなんだよ〜・・・・」

夕食後の団欒とした時間。みゆきもみゆきで今朝の事を家族へと相談していた。

「でも、そんなに怒ったってことはその鳴神君という子は本当に大事に思ってるんだね。普通の子じゃこうはならない」

――――なんでだろう。胸がチクリと痛んだ。

「そうなんだよ。つばき君て、何時もは何にも無関心でぶっきらぼうで、それで意地悪するのに何故か黄瀬さんのことになると過剰反応するんだよねぇ・・・・」
「でもみゆきにも非はあるのよね？」
「それを言われると、なにも言えない・・・・」

　果たしてどうしたらいいものか。答えのでないまま堂々巡りをしていると、何か思いついたように名前を呼んだ。

「なにお父さん？」
「男っていうのは、不器用な生き物なんだ。伝えたいことがあるのに、それができない。だからつい、気持ちとは正反対のことをやってしまうこともあるし、すぐ熱くなりもす

る。でもねみゆき。そういう時っていうのは、大体後になって後悔してるもんさ」
「そうかな？私、酷いことしちゃったのに・・・・」
「確かにみゆきは彼に対して失礼なことをしたかもしれない。でも、決してみゆきを傷つけようとはしなかった。違うかい？」

よく言葉を思い返してみる。言われてみれば、責任をとれるのか、ということしか言われていない。普通あそこまで怒っていたら罵倒の一つや二つ、あってもおかしくはない。なのに、つばきの口からそれが出ることはなかった。ただ、巻き込みたくない、傷つけたくない、その想いででた言葉だった。

父の質問にみゆきは「うん」と頷く。

「たった一人の女の子のためにそこまで怒れるんだ。それほど心が素直な子なんだよ、きっとね。みゆきがそこまで言うんだから、そうなんだろう」
「そういえば、みゆきの口から男の子の名前がこんなに頻繁に出たことってなかったわね。これってもしかして・・・・」

何かを感づいた両親が顔を見合わせる。だが当の本人は全くわかっていない様子で

首を傾げるしかない。

まあ、とにかく。

「なんだかよくわからないオチだったけど、明日つばき君に謝ってみる！」

決心は、ついたかな。

Episode12

「ごめんなさい！」
「ごめん！」
「え、私が悪いよ！」
「いや、俺が悪いって！」

朝から仲がいいな、とその光景を見てあかねはやれやれと苦笑した。朝顔を合わせるなり互いにキレイに９０。頭を下げて謝罪の言葉。そして次に罪の取り合いとはこれまた和気藹々としたものを見たと思う。この二人のシンクロぶりはなんだか見ていて飽きない。

約一名、若干不満顔な者がいるがそれは触れない方がいいだろう。

とはいえ触れなければならないのが今日と言う日だ。物理的にということではない。話題的にだ。

「そういえば今日はポスターの先行展示の日やったけど絵はできたんか？」

「うん。まあ、なんとか・・・・」

自信なさげに言うのはいつものことだが、今日はそれに緊張と恐怖感が混じっているのがわかる。スカートを握る手が僅かに震えていることから彼女が今どんな心境でここにいるのかが窺える。

「そかったね、つばき君。仲直りできて」

「色々と考えて軽く頭痛がするけどな・・・・」

〔慣れないことはするものじゃないな〕とゲキリュウケン。それに小さく周囲に聞こえない程度に「うっさい」と返す。それよりもと気分を変えるようにしてみゆきが展示されている掲示板へ行こうと提案し下駄箱から廊下を右へと曲り、職員室へと続く廊下の途中。緑のコルク材の壁の掲示板にいくつもの絵が貼られている。個性的なものばかりで描いた人物の特徴がよく出ている。と、群がる野次馬を掻き分けて目的の絵を探す。すると、3段あるうちの2段目、右から5枚目の絵でちょうど真ん中だ。見つけたみゆきは「おお～!」と目を輝かせる。

「すっごい！コレ本当に黄瀬さんが描いたの!?」
「う、うん・・・・」
「黄瀬は昔から絵を描くのが得意でな。俺もよく描いてもらったよ・・・夏休みの宿題のポスター」
「ええ話だと思ったウチの感動を返せ。今すぐ返せ」
「ちなみに一年の時の動物愛護のも黄瀬の作だ」
「ドヤ顔しとるけどやっとることはサイテーやからな」

そんなあかねとつばきの漫才を見ながら笑うみゆきをみてああ、いつもの光景だとホッと息をつくやよい。だが、この後その空気も壊れさることとなる。

「おや・・・なんだいこの絵は」

そう言って現れたのは美術部期待の星と言われている二年の蔵星だ。眼鏡に少し白髪が混じったような髪にスラリと伸びる背丈。そして男とは思えないほどキレイな指先。如何にも絵描きと言わんばかりのその風貌を知らない者は学年内ではいないほどの有名人だ。

主に、あまりよくない意味で。そんな彼がやよいの絵を見て呟いたのだからこれからロクなことにならないだろうなと予想しながら蔵星の言葉を待つ。

「まるで子供が描いた絵じゃないか。これを描いたのは・・・黄瀬やよい？ああ、君か」

絵の前に立っているやよいを見てそう言う。明らかに人を見下したような目の蔵星はニヤリと口元を歪める。

「いくら校内清掃ポスターだからと言ってこんなくだらない絵を飾ってもらっては困るよ。絵というのは人の心を映すもの。それがなんだいこれは？まるで小学生レベルの低クオリティにもほどがあるよ。こんなものが選考に加わるなんて愚の骨頂だね」

よくもまあ難しい言葉を並べたもんだとつばきは内心で評価する。要は自分の絵と張り合おうなんて愚かな奴もいたもんだ、ということが言いたいらしい。こういう輩は漫画の中とかだけに存在するもんだと思っていたが本当にいるところを見るとある意味天然記念物とか絶滅危惧種とか、そういう部類に入るのではなかろうか。

まあ、それでも気に食わないのでとりあえず殴っておくか。そう出ようとした時、自

分よりも早く動いた人物がいた。

「くだらなくなんかない！この絵は、黄瀬さんが一生懸命描いた絵なの。バカにするなんて、許せない！」

見開いてみゆきを見る。普段はニコニコと笑顔のイメージがすっかり定着していただけに、彼女の本気で怒った顔を見るのは新鮮だ。

「・・・・なあ、青木副生徒会長？」

掲示板に絵を貼り付けるためにいたれいかをちらりと見てニヤリと怪しげに笑らいながらつばきは言葉を発した。それに返事をしたれいかもどうやらこれには腹をたてたようでその顔をみてさらにつばきは笑う。

――――いいねぇ、ワルくない。

「この展示会、優劣を決めるものでっけか？」

「いえ。形式上、たしかにそう見えてしまいますが、これはあくまでも校内清掃強化月間

のイメージポスターを決めるものであり、絵の優劣は全く持って関係ありません」
「つまり、絵が上手ければ上手いほど選ばれる確率が高くなるなんてことは…」
「ありません」
「ってことはだ。おまえが描いた絵が絶対的に選ばれるなんて保障はどこにもないってことだな蔵星?」
「・・・・なにが言いたい」
「お高くとまってっと足元すくわれるぜ?美術部エースさんよ。それと、誰に喧嘩売ってんのか少し考えてからバカにするんだったな・・・・」

おそらく、それを一言で言うなら見えなかった、だ。あかねとしては運動神経には自信がある。それも反射神経といった目や感覚のことに関してはバレー部でも養われている為普通の人よりは早く動くものを捉えるということに関しては秀でている。そんな彼女でも、鳴神つばきの腕はまるで見えなかった。一瞬の内、れいかが持っていたボールペンを取り、蔵星の喉に突き立てている。触れるかふれないかぐらいの微妙な距離に突き立てる辺りさすがだなとれいかは思った。

とはいえ、こういう場面は生徒会副会長として見過ごすわけにはいかない。二人の間に割って入り、つばきからボールペンを取り上げる。

「鳴神君、ボールペンは字を書くものです。人を脅すためのものではありません。それから蔵星君。あなたも、言葉には気を付けてください。特に、彼の前では冗談抜きで私でも止められるかどうかは保障しかねます」

どういう意味かは理解できますよねと目で訴える。一瞬舌打ちをし、バツが悪そうにしてその場を去る。ここで捨て台詞を吐かないあたりは少しだけ褒めてやろうとあかねは評価する。そこで聞こえてきたヒソヒソ声に耳を傾ければ、何とも酷い内容だった。

「思い出した、あの鳴神つばきって男子生徒、確か小学生の時問題起こしてかなり騒ぎになったとか」
「ああ、あれでしょ？剣道の大会で相手の子を意識不明に追い込んだとか」
「それ知ってる。他にも、数人病院送りにしたって噂だぜ」
「マジかよ!?なんでそんな奴がウチの学校にいんだよ…」

まあ、所詮噂は噂やなと知らん顔するあかね。だがそれを心底気にしている子が目の

前にいるのを見て溜息をつく。「気にしたらアカン」、そう言おうと手を置こうとしたが、それよりも早くやよいが動いた。自分の絵を素早くはがし、つばきの手を取って走り去る。みゆきがそれを止めようとするも、それをれいかが引き止めた。何でと抗議の声をあげようとするも彼女はただ首を横に振り、追うなと意思表示すると言葉をつづけた。

「こればかりは、私達の入る余地はありません。最近転校してきた星空さんであればなおさらです」

「でも…!」

「やめとき。あの二人にしかわからへんもんがあるんや。つばきにはやよいの、やよいにはつばきの事がわかるんや。他人のウチらが入る隙間なんてどこにもないんよ」

れいか同様みゆきを宥めるあかね。後ろ髪引かれる思いに駆られつつも、みゆきは二人の去った後を見つめた。

◇

「やっちゃった～・・・・」
「あれ、なんかデジャブ」

うな垂れるやよいを見て先日の自分を思い出す。やっぱり１０年近くも幼馴染やってて近くにいると似てくるのかなぁなんて思いながら隣の階段に腰掛ける。

「しっかしなんであんなことしたんだよ。授業遅れるぞ」
「いつも寝てるじゃない。…つばき君は気にしないの？あの子たちが言ってたこと」

本当は違うのに、というが、実際は少し事実も含まれているので何も言えなかったから黙っていたとは言えないので、とりあえずは気にしていないからと返しておく。それでも納得がいっていないのかまだうな垂れているやよいをみて溜息をついた。

「私は、悔しい。だってつばき君は私の――――」

「よせよ。俺はそんな憧れの視線で見られるようなガラじゃないし、ましてやヒーローなんてそんなキラキラしたもんでもないしな」
「ううん、そんなことない。初めて逢ったあの時から、つばき君は私のヒーローだもん」
「・・・・恥ずかしいセリフ禁止」
「ええ?!」

そんな会話をして、二人しておかしくなって笑う。その感覚に久しぶりだな、と感じて少し懐かしさに浸っていると、一陣の風が吹いた。結構強かったらしくやよいは絵を持っている手を離してしまい、スカートを押さえる。当然、絵は風に煽られ宙を漂いながらヒラヒラと飛んで行ってしまう。

「あ、ポスターが…!」

ヒラヒラ漂うポスターを追うやよい。地面に落ちたところでホッと息をついたのもつかの間で今度はそれを拾い上げた人物を見てつばきが息をのんだ。

「なんだこれ・・・・校内清掃?にしてもヘッタクソな絵オニ!」

身長は、ざっと見て2メートルほどの大柄な躰。皮膚が火傷でもしたかのように赤々としており、東部からは二本の角が生えている。口も図体と同じで大きく、ギラリと鋭利な歯が見えていた。黄色と黒の縞模様のパンツと担いだ金棒は、まさにおとぎ話に出てくる赤鬼そのものだ。

「それを返して！」

「あ？そう言われて返す鬼はいないオニ」

鬼はいないだろう、現実には。そんなツッコミを入れつつばきは駆けだしてやよいを飛び越え、現れた赤鬼――――アカオーニに対し顔面に跳び蹴りをかます。当然、つばきのことなど眼中になかったアカオーニはそれを諸に喰らいよろけて後退る。

「黄瀬、逃げろ！此奴は人間じゃない！」

「え、ど、どういうこと!?」

「あいたたた・・・いきなりなにするオニ！もう怒ったオニ！」

そこからの流れはあのウルフルンと全く同じだった。取り出した白紙の絵本に黒い絵の具を塗りたぐり、あの空間を発生させた。一つ違うとすれば、周囲の雰囲気だろうか。ウルフルンのは夜を連想させるものに対し、こちらはどこか鬼ヶ島にでも来たような印象を思わせる。

「しまった、黄瀬！」

膝を着き、うな垂れながら黒いオーラを発するやよい。遅かったと舌打ちをするつばきはアカオーニを睨み付けた。

「ゲキリュウケン！」

腰のゲキリュウケンを実体化させ、構える。やよいの前で変身するのは些かためらわれるが、この状態では覚えてないだろうと判断し、魔弾キーを取だす。

「リュウケンキー、発動！」

〔チェンジ、リュウケンドー〕

「ゲキリュウ変身！」

ゲキリュウケンから放たれた青い竜が咆哮を上げ、つばきの躰へと吸い込まれていく。高ぶった魔力が鎧へと姿を変え、つばきの変身は完了する。

『リュウケンドー、来迅！』

〔キュアハッピーとキュアサニーがまだ来ない。持ちこたえるぞ！〕

『言われるまでもねぇ。此奴は・・・・俺が倒す！』

絶望に沈む少女を背に、剣士は構えた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３

「出でよ、アカンベー！」

握りしめた赤っ鼻を天高く掲げれば、そこから黒いマイナスエネルギーが噴出される。キュアデコルをバッドエナジーで包み込み、光の力を捻じ曲げて闇へと変換させたそれは依代となるものを求めアカオーニが指定したものへと流れ込む。それは一枚の紙切れ、やよいが心血そそぐ想いで書き上げたポスターだ。現れたのはポスターに描かれていたヒーローとは真逆の悪役の姿。ピエロの鼻が皮肉にもよく似合うのが恨めしい。

『テメェ・・・・！』

もちろん、それを見て冷静でいられるほどリュウケンドーこと鳴神つばきは大人ではない。現れた直後ゲキリュウケンを携えて咆哮をあげながら切りかかる。体格差は言

わずもがなではあるが、それでも魔弾剣士は臆することなくその巨体へと斬撃を叩き込む。が、それでもどうしても体格差というものは事戦闘には優劣を分けてしまう。相手の攻撃は見切れる、回避も容易だし、こちらが攻撃を当てやすいのもたしかだ。しかし、そうメリットばかりではない。手にした得物である箒をブンブンと振り回せば闇雲でもかなりの脅威となる。

『ぐわ…!』

〔箒が邪魔で近づけない・・・・リュウケンドー、ここはファイアーコングだ〕

『言われなくても!』

ファイアーモードへと武装し獣王であるファイアーコングを召喚する。炎の属性変換能力を有したキャノンに変形しリュウケンドーに装備される。砲身に備わったトリガーを引けば連射形式で炎の弾丸が発射される。が、それさえも楯の役割を果たしている塵取りにより防がれ、まるで打つ手がない。毒づくリュウケンドー。後ろにはやよいが。ここで引き下がるつもりはさらさらないがこれでは八方ふさがりだと舌打ちをする。

「ダブルプリキュアキーック！」

待ちかねた声が聞こえてアカンベーは死角からの直撃をくらい倒れる。蹴りの反動で回転しこちらに着地したのはハッピーとサニーだ。

『オッセーぞ！』

「仕方あらへんやろ、この結界みたいなん思ったより頑丈なんやから！」

「でも、遅れた分はキッチリ返すよ。サニー！」

「よっしゃ！」

なぜだろう、嫌な予感しかしない。そう思いつつもリュウケンドーは駆けだしていくサニーを止めようとはせずに何をするのかと後姿を眺める。

「プリキュア・サニーファイヤー！」

やっぱり必殺技かと思う。それをみてやっぱりこの光景どこかで見たなと記憶を探るとそういえばハッピーもこんなことやったっけと思い出したときにはもう遅い。サ

ニーファイヤーは塵取りに当り、なんとか破壊するも不発に終わる。だがこれで奴を守るものは無くなったとファイヤーキャノンを構えるが、それよりも早くハッピーシャワーが脇を抜けてアカンベーへと向かう。サニーは囮で、本命はハッピーかと思ったがこれも不発。あっさりと躱されてしまった。技を使った疲労によりペタンと座り込む二人を見て『学習しろ!』と怒声を飛ばす。アカオーニと高笑いが響く中、しびれを切らしたリュウケンドーはもう一度キャノンを発射。しかし塵取りは無くなったものの箒が健在なためそれを前に出して振り回すことでファイヤーキャノンをやり過ごしてしまう。そして今度は此方の番だといわんばかりに箒とパンチによる猛襲がくる。耐えるリュウケンドーだったが、嵐のような猛攻の前に膝を着いてしまう。ファイヤーコングが消え、モードも元に戻ってしまう。

「どうしたオニ、さっきまでの威勢がまるでないオニ!」

クソッタレが。心中で呟いてみるもパワーでごり押しされている為思うように攻められない。疲労はダメージと共に蓄積されていき、やがて立つことさえままならないような状態に。

「あ、アカン、足に力入れへん・・・・」
「なんの、これしき・・・・やっぱりダメ～」
『気の抜けるような声出すなっての・・・・・!』
「ガハハハ!それにしてもお前も馬鹿オニ。こんな絵一枚で何ムキになってるオニ?」
『こんな絵、でもな…アイツにとっちゃ一生懸命描いた大事なものなんだよ。それを貶したり悪用する奴は何がなんでも許せねー…ただ、それだけだ』

ゲキリュウケンを杖のようにして立つリュウケンドー。しかしそれもすぐ崩れて膝を着く。もう限界か、そう思った時、目の前に出た影に視線を上げる。そこには、先ほどまで絶望していた筈のやよいの姿が。

『おまえ、どうして…!?』
「…聞こえたの。星空さんの声、あかねちゃんの声、そして・・・・つばき君の声。私のこと、一生懸命守ろうとしてくれたのがわかった」

振り返り、リュウケンドーの手を握る。その手が震えていたのを、彼は見逃さなかった。怖いならどうして逃げなかったと言うと、やよいは静かに首を振った。

「私とつばき君が始めて出逢った時もそうだった。泣いてる私を、つばき君はこんな風にして手を握ってくれた。その時、すごく安心したの。それから、いつも守られてばっかりで…自分では何もできなくて。そんな自分がイヤで、変わろうとしたけど・・・やっぱり駄目だった。また、私は守られてばかり。でも――――」

立ち上がり、アカンベーと真っ向から対立する。震えながらも、恐怖で逃げ出したい、泣きたい気持ちを一生懸命抑え込みながらやよいは腕を広げる。

「もう、守られてばっかりじゃダメだってわかった。今度は、私の番。私がみんなを――――つばき君を、守りたい！」

――――その時、何かが弾けた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４

憧れた背中があった。

憧れた勇気があった。

幾つものすれ違いを経て、ようやく私は彼の隣に、ほんの少しだけ近づくことができた。でもそれは凄く恐くて、彼が見ている景色は自分が今まで見てきたどんなホラー映画よりも恐怖で満ちていた。

でも、そんな恐怖でさえ、今は平気。不思議と湧いてくる力と勇気が震えを止め前を見据える強さをくれる。これはほんの小さな一歩でも、それでも自分にとっては大きな一歩。

だから――――

「ピカピカピカりん、じゃんけんポン！キュアピース！」

◇

目を疑う。でもそれは紛れもなく現実であり覆すことのできない確かなもので、今見えている少女の姿はまさに探していた３人目のプリキュアだ。出来れば無縁でいてほしかった、そうであってほしいと願った幼馴染の少女の、もう自分の知る泣き虫で弱虫の黄瀬やよいではなくなっていた。今見えているのは３人目のプリキュア、キュアピー

ス。黄色い衣装に身を包み、かわいらしく名乗りを上げたその姿はとても伝説の戦士とは形容しがたいものがあるが、それでもプリキュアであることに変わりはない。

唖然としているのもここまでだ、と思考を切り替えて隣に立つ。

『・・・・本当にいいのか？』

「うん。決めたから。私も、頑張るって」

『・・・・そうか。なら、充分だな』

そう思う反面、少し寂しそうにリュウケンドーは笑った。

「人数が増えようと、今更関係ないオニ！やれ、アカンベー！」

アカオーニの指示でアカンベーが箒を振り回す。巻き起こった突風に耐えながら、二人は駆けだす。

『あの箒は俺が何とかする。その隙に攻撃を！』

「うん！」

手の中にある黄色のエンブレムのマダンキーをゲキリュウケンに差し込む。

〔チェンジ、サンダーリュウケンドー〕

『雷電武装！』

駆けながら、ゲキリュウケンをアカンベーの攻撃に合わせて突き出す。振り下ろされた箒はゲキリュウケンから放たれた黄色の竜のエネルギー体によって弾かれ、電撃の特性も相まって腕を関電させ数歩下がる。天高く舞い上がった竜は雄叫びを上げてリュウケンドーめがけて降りてくる。それを受け入れるようにして手を広げ、竜は鎧へと同化しサンダーリュウケンドーへと姿を変える。

「恰好が変わったオニ!?ずるいオニ！」

『ずるいとか悪役の使う言葉じゃねーだろ！キュアピース！』

「たあああああああああああああッ!!!!」

助走で勢いのついたまま跳躍し、空中で回転してキックを放つ。ピースの強烈な蹴り

が直撃したアカンベーはノーガードのままそれを喰らい躰をくの字に曲げて吹っ飛び地面に倒れる。

〔キュアピースにはパワー特性はない、だが、その特性である雷を利用すれば、瞬間的な加速やパワーであれば、プリキュアの中でもピカイチだ〕

「そんなぁ!?」

愕然とするアカオーニ。開いた口が塞がらないとはまさにこのことだろう。先ほどまで有利に進んでいた戦闘が一瞬にしてひっくり返ったのだから。しかも、あの泣き虫だった人間一人のせいで。これほど予想外すぎる展開はアカオーニでなくても予想はできないだろう。

吹っ飛んだアカンベーをみてキャンディが歓声をあげる。

「二人の力でアカンベーを浄化するクル！」

「ヒーローには合体技がつきものだもんね。リュウケンドー！」

『だから俺はヒーローじゃ・・・・って、今はまぁいいか』

ツッコミも野暮だろうとホルダーからファイナルキーをゲキリュウケンに装填する。その間、ピースもスマイルパクトにエネルギーを籠め、両者に準備は整った。

「プリキュア・ピースサンダー！」

雷をピースが放つ。そしてその光はゲキリュウケンへと集約されていった。

『プリキュア、魔弾龍、剣士。三つの力が、今一つに。三位一体・雷電斬り！』

目で追えない程の速さで一瞬にして距離を詰め、完全に起き上がる前にゲキリュウケンを振り下ろす。落雷にも似たその斬撃はアカンベーを一刀両断し、浄化する。

『闇に抱かれて眠れ・・・・』

「・・・・っ～、悔しいオニ！次こそは絶対にコッペパンにしてやるオニ！」

アカオーニが消える。

「それを言うならコテンパンやろ」

サニーのツッコミが入ると同時にバッドエンド空間もなくなり元の世界へと戻った。

◇

「結局こうなるか・・・・」

目の前ではしゃぐやよいを見ながら深く溜息をつく。なんだかもう全て此奴（みゆき）のシナリオ通りなんじゃないかと思うほどドンピシャで当てていることに内心驚くとともに怪しいものを見るような目で見る。

「そんなに見つめられると照れちゃうよ～…」
「・・・・んなわけない、か」
「ちょっと、どうしてそんなにバカにしたように言うのさ?」
「お前が紛らわしいことするからだ。大体なんでこうもホイホイ見つかるんだよ、もう3人目だぞ?しかも同じクラス。これは見えない大きな何かしらが働いているとしか思えん」

大げさな、と呟くのはあかねだ。

「まあでもええんとちゃうか。そのおかげでこうして今回は助かったわけやし」
「そう何度も続いてたまるか」
「でも、私はよかったよ?だってこれで心置きなくみんなと一緒にいられるし」

またお気楽な、とつばきは頭を抱える。そんなつばきに同情するようにあかねが苦笑いを浮かべ、またしても深いため息をつく。

「今日はやよいちゃんもプリキュアになれたし、おまけにつばき君とも仲良くなれてウ

ルトラハッピーだよ！」
「おい俺はおまけか」
「ヤダなぁ、言葉のあやだよ」

こいつ絶対後で泣かせてやるなどと腹黒いことを考えていると先頭を歩くやよいが不意に立ち止まって此方を振り返った。満面の笑みを浮かべるこの子を、久しぶりに見た気がするとつばきはほんの一瞬その笑顔に魅入る。

「みゆきちゃん、あかねちゃん、キャンディ。これからよろしくね！」

それから、と目線が此方に向いたのに気づいてまた溜息。これはもうしょうがないと諦めて薄く笑う。

「敵前逃亡なんてすんなよ？」
「しないもん。なんてったって私、スーパーヒーローだから！」

そこはヒロインじゃないのか？と言いたかったが本人がかなり盛り上がってるので

そこはあえて言わずに飲み込む。すっかり浮かれ気味で本当に大丈夫かと思うも、さっきの言葉から確かな意思を見たつばきは小さく息をつくだけで済ませる。

そして、

「そんなにはしゃいでると、周りからヘンな目で見られるぞ？」
「は、そうだった・・・・」
「・・・・ったく、変わんねーなそういうとこ」
「うう・・・・意識したら急に恥ずかしくなってきた…」
「・・・・ホラ、行くぞ。？やよい？」

やよい――――名前が呼ばれたことで目を見開く。

「つばき君、今、なんて・・・・？」
「ん？やよいって呼んだだけだけど」

無意識のうちにでた言葉。訊かれてようやくつばきも理解したようでちょっと気恥

ずかしくなったのか少し顔を赤くしてそっぽを向いて歩き出す。その様子にニヤニヤしながらみるあかねとみゆき。キャンディは楽しそうだと鞄の中ではしゃぎ、ゲキリュウケンはやれやれと半ばあきれ気味に溜息。

（…でも、なんだろ?この感じ・・・・ちょっとだけ、チクチクする・・・・）

笑顔でいながらも、仲良く並んで歩く二人をみてみゆきは少しだけ胸を押さえる。それに気づいたあかねがどうかしたのかと訊くと「なんでもない」とまたすぐに笑顔に戻り「私も混ぜて!」と二人の間に入っていく。首を傾げながらもあかねもそれに続く。

楽しそうなはしゃぎ声が、夕暮れの帰り道に響いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５

昼休み。七色が丘中学校では給食はない。その為個人が弁当を持参するか、食堂の売店で買うかのどちらかになっており、つばきは売店でのパン争奪戦を制しご満悦の顔で現在むさぼっている。一口かじればバンズに挟まれたジューシーな肉と野菜のハーモニーが絶品なハンバーガーとウーロン茶である。

「え～!?やよいちゃんのお弁当って、キャンディ!?」

何をバカなことをと慌てて振り向くと、そこにはやよいの持参した弁当箱にでかでかと存在感を放つキャンディがいた。

「おまえ、いくら腹が減ってるからってなにもそこまでしなくても・・・・!」

「違うから!」

矢継ぎ早に否定するやよい。よく見て見ればキャンディをイメージしたもので、顔は白米で瞳は海苔を切ったものを貼り付け耳は丸くした卵焼き、リボンはウィンナーを切り取り、頬は桜でんぷん。そして顔にある装飾などは人参をハートの形に切り取ったものだ。周囲にはからあげ、ブロッコリー、プチトマトなどなんとも手作り感あふれるものとなっている。

だが、驚くべきところはこの弁当、かなり完成度が高い。一瞬見間違えた（本物はしっかりとみゆきの鞄の中から顔を出している）ように、彼女の手先の器用さがうかがえる。

「これ、もしかして手作り!?」

「うん、ちょっと作ってみたくって」

「やよいって昔っからこういうとこ器用だもんな。・・・・他はダメダメなのに」

「一言余計だよぅ・・・・」

「上げて落とす。これぞつばきクオリティ。…にしてもホントスゲーな」

つばきとみゆきがやよいの弁当にくぎ付けになる中、遅れてきたあかねがひょっこり現れから揚げを一つ頬張った。

「あ〝〜、キャンディを勝手に食べちゃダメクル！」
「あかん、むっちゃおいしい」
「クル…」

その会話はどうなんだ、と心中でツッコミを入れてふと視線をあげる。するとなにやら不機嫌そうな顔でこちらに歩いてくる女子生徒が二人。ヤな予感しかしないと感じつつ、キャンディを半ば強引に鞄へ押し込む。突然のつばきの行動に怪訝な表情をする二人だったが、それがすぐにどういう意味かを察して何事もなかったかのように会話を再開させる。

「ちょっとあなた達、移動してくれない？」
「ここはあたし達の場所なの」
（ああ、やっぱそういう類か・・・・）

心底めんどくさそうな顔をするつばき。

「私たち、いつもここで食べてるの」

苛立ったように語調を尖らせる。何様のつもりだとネクタイピンを見て学年が一つ上だということを確認する。中学三年にもなって食事の場所が先を越されていたからといってこの荒れよう・・・・。

（ちっちぇーな）

「早い者勝ちとちゃうんですか?」

それにあかねが反論。それに学年が下なんだから譲るのが当たり前だと言い張る相手。二対一の構図がすかり出来上がってしまっている為さすがのあかねもいつもの勢いがなく、さらに体育会系というノリが幸いし口どもってしまう。どうしたらいいかわからず両者をかたづを呑んで見守るみゆきとやよい。言い争いはさらにヒートアップし、これはマズいかと思った時、違う声がさらに乱入してきたことに視線が集まる。

「先輩…たとえ先輩でも、後から来て場所を横取りするのは、おかしいと思います」

きっぱりと言い放つのは緑川なお。つばきの知っている限りでは一番こういうのが

大嫌いな女の子だ。

「横取りだなんて・・・・！」

「中庭はみんなの場所です。先輩たちの言うことは、少し筋が通ってないとおもいます」

「少しってか、かなり通ってない気もするけどな」

そして火に油を注がごとくつばきが呟いた。

「あら、貴方よく見たら噂の・・・・」

「確か、アレよね。暴力事件起こしたって言う…」

女子生徒が言った言葉にみゆきは首を傾げる。

（暴力事件？つばき君が・・・・？）

にわかに信じがたいとみゆきはつばきを見る。たしかに彼は荒っぽいしどちらかと言うと意地悪な男の子という分類にみゆきは認識している。だがそれ以上に他人に対

して思いやりを持ち誰かを傷つけるようなことはしないはずだと理解している。だが、先日のやよいとの一件といいどうも自分のしらないことがまだありそうだとみゆきは思った。

「貴方たち、よく一緒にいられるわね?もしかして同類・・・」

「違う。つばきは、そんなことぜっったいにしない。何も知らないのに、噂だけで判断するのって浅はかですね?」

まさに一触即発。今にも取っ組み合いが始まりそうな雰囲気になる。みゆきとやよいは身を寄せ合いオロオロとし、キャンディはあまりにもの迫力に鞄の中で縮こまっている。あかねは「なにしてくれてんねん!」とつばきに小声で叱咤し、つばきは「これ俺が悪いのか!?」とリアクション。そんな彼をやれやれとゲキリュウケンが呆れている。

「ハハハ、そうだね」

またもや新な乱入者。二人が振り返ればそこには現七色が丘中学校の生徒会長にし

て彼氏にしたい男子生徒ナンバーワンの入江直樹が立っていた。整った顔立ちに成績優秀文武両道。まさに絵に描いたような優等生だ。

「確かにきみの言う通りだ。人を見かけや噂だけで判断してはいけない。それに、中庭はみんなの場所だもんね」

そう言って微笑みを浮かべる。空気が一瞬にして変わったことに絡んできた女子生徒二人を見ればわずかに頬を染めているのがわかる。そしてつばきは心の内げこう呟いた。

ああ、もっと面倒なのが来た、と。

僻み（ひがみ）にしか聞こえないようだが、これが事実なのだから仕方がない。入江の鶴の一声もとい、鶴の一笑みでガラリと態度を変えた二人は此方に謝罪して去って行った。

「・・・・って、俺にはなんにもないんかい！」

「お、ええツッコミや」

「緑川さんありがとう！」

「あたしは当たり前のことを言っただけだよ。それに、友達があんな風に言われて黙ってるなんてできないからね」
「あらやだイケメン」
「前言撤回」
「冗談だっての。それよりこれからいつものか？」

つばきがなおの持っていた荷物を指さして言う。明らかにこれから昼食という荷物でないことから彼女がサッカーの自主練習をすることを予想する。

「うん。それじゃ！」

颯爽と現れ、颯爽と去っていく。どこぞのヒーローみたいだ。横を見れば、何やら目をキラキラさせているつばき命名、起爆剤系女子星空みゆきが何やら閃いたようにニコニコしている。正直、またかと思うもこれも半ばバカにできないと本気で思う。

「…もしかして」
「そう！そのもしかしてだよ。さっそく放課後に練習覗いてみよう！」

◇

そして、放課後。部活動への強制入部制度がないこの学校では終業と同時に下校することになるが、部活動に加入している生徒たちはこれからスポーツや文化活動に精を出す頃。一際人だかりのできる部活動の練習風景がある。

広いグランドに敷かれた白い線。綺麗に真中で区切られ、両サイドに鉄骨でくくったネットを貼り付けたゴールを配置し、白黒の球を足を用いて転がし指定の場所に入れ、点数を競う、世界でもっともポピュラーなスポーツとして親しまれているアレが行われている。七色が丘中学サッカー部、女子の方の練習風景だ。普通はこういうものは男子に目が行きがちだが、生憎とこの学校のサッカー部はなぜか女子サッカー部しか存在しない。以前はあったそうだが部員の加入がなかった為廃部になたらしい。

では、なぜ人だかりができているのだろうか。理由は至って簡単だ。現在、一人の女子がエースナンバーのゼッケンをつけてコート内を縦横無尽に駆け回っている。華麗な足さばきは素人目にはボールがくっついているんじゃないかと錯覚してしまうくらいに凄い。ひとたび彼女にボールがまわればそれはすなわち、得点を意味するというほどに。さすがは一年の内からそうそうにレギュラーを勝ち取っただけはある。

緑川なお。二年二組の姉御とも言われている頼りがいのある女の子だ。

ゴールが決まれば一際大きな歓声があがる。主に、女子から。

「私、４人目のプリキュアは緑川さんがいいと思う！」

「…わかったよ、もう降参だ。好きにしろ」

顧問の教師がホイッスルを吹いて練習は終了となる。それを機になおに突撃しようと試みるが・・・・

「相変わらずすんごい人気やなぁ、これじゃ近づけへん」

練習しているだけでもアレだ。終わったともなればファンが詰めかけるのは当然と

言えよう。が、みゆきは果敢にもその輪の中へと飛び込んでいく。――――プリキュアというＮＧワードを叫びながら。

「アホ！」

つばきにひっぱたかれてうずくまるみゆき。目じりに涙を浮かべて「なにすんのぉ」と恨めしそうに見上げてくる。

「大勢の前でンな重要かこと漏らすな。それに、もうアイツならいないぞ」

「え!?――――そ、そんなぁ・・・・」

◇

「はっぷっぷ～」

納得がいかないみゆきはベッドに身を投げて不満そうに口癖をもらす。どうしてもなおにプリキュアになってほしいという衝動が収まらずに部屋のあちこちをうろうろしてみる。

ふと、昼での出来事が頭をよぎった。

「暴力事件、か・・・・」

やよいといい、なおといい、自分の知らないつばきを知っている二人に少しモヤモヤとしたものを抱くみゆき。ほかの生徒たちがそれぞれ口にしている彼への評価は正直良くない。クラスメイトではあまりないものの、それでも疑念の視線を向ける者は少なくない。むしろ、あかねややよいと言ったつばきに積極的に関わっていく生徒の方が珍しい。みゆきはまだ転校してきて日が浅い。知らなくて当たり前だが、これはいくらなんでも酷いと思う。

でも、それをどうこうできるほどの何かしらがあるわけではない。言い知れぬモヤモヤがまた大きくなりみゆきはベッドの上をゴロゴロと転がる。

「みゆきはつばきの事を考えるといつもこうクル」
「そう？」
「そうクル。悩んだり、笑ったり、とにかくちょっと違うクル」

キャンディの指摘で「う～ん」と考えてみる。

「そういえば私、男の子とあまり喋ったことなかったかも」
「クル？」
「昔ね、私が今よりももっと小っちゃかった頃のことなの。その日は幼稚園もお休みで――――って、そうだ、お休み！」

何か閃いたように立ち上がる。いきなり立ち上がったことにキャンディは転がり落ちてしまう。

「明日は土曜日！お出かけしよう！」
「お出かけクル!?」

「うん。緑川さんに会いに行くの！そうと決まれば連絡連絡～」

上機嫌で部屋を出ていくみゆき。明日晴れることを願って、彼女は電話の受話器を握った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１６

今宵は日曜日。春麗らかな穏やかな日曜日。こういう日はただひたすらゴロゴロ過ごしてダメ人間の限りを尽くす、至福の時。今日はさくらも友人と出かけていていないし自由にしたい放題――――だったのだが。

「どうしてこうなった・・・・」

「だって私引っ越しきたばかりだもん」

壮大な溜息に返すのは昨晩突然電話してきたみゆきだ。「緑川さんの家へ連れてって！」と昨晩要件と日時を伝えるなり一方的に電話を切った為、仕方なく行くことに。何が楽しくてこんなことしなければならないんだと愚痴を垂れてはいるものの、つばきとしては久しぶりの緑川家。もう数年近くは足を踏み入れていないので少しのドキドキもあるが、やはりメンドクサイというのが勝っている。学校に行けばイヤでも顔を合わせるし、避けていても向こうから絡んでくるので正直一日でも目にしない方が貴重であ

る。
　が、こうなってしまってから嘆いても仕方ないのでこれぐらいにしてみゆきを後ろに引き連れて歩く。と言っても、ご近所なのでそう離れてはいない距離にあるので散歩と思えばどうと言うことはないし本人がいなければ諦めて帰るだろう。そう、思っていた。

「あれ、つばき。…に、星空さんも。珍しい組み合わせだね？」
「空気読めやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「ひっ!?」

◇

「どうしてこうな・・・・あれ、なんかデジャビュ」
「いや～悪いね、手伝わせて」
「大丈夫大丈夫。ね、つばき君？」
「いつかゼッテー泣かす」

大量の買い物袋を一方的に男子だからという理由で全て押し付け、みゆきはというと僅かに残ったエコバッグのみを肩にかけて歩く。これが女の子の買い物に付き合わされる彼氏の気持ちと言うやつかと理解すると、絶対に女子とは買い物にだかけまいと頑なに誓うつばき。

「ごめんつばき。もうちょっとだから」
「あ、緑川さん。私話があって・・・・」
「話？」
「うん。あのね、実は私とあかねちゃんとやよいちゃんと――――あ、つばき君もなんだけどね。プリ…」

と、みゆきの話が半分も消化されないうちに玄関のドアが横に開き、中からゾロゾロ

と子供たちが出てきた。なおを見れば「お姉ちゃん」と言い、つばきを見た一番大きな男の子が「シショー！」と言う。ちなみに彼女の妹弟を順に紹介すると、けいた、はる、ひな、ゆうた、こうたといった順になっている。つばきの事をシショーと呼んだのはけいただ。

「シショー、押忍！」
「いや、おまえの師匠は俺じゃなくてさくらの方――――」
「シショー！」
「・・・・はい、シショーですよぉ」

かんねんしたように肩を落とすつばき。「シショーってなに？」とみゆきがなおに耳打ちすると、

「けいたはね。つばきのお爺ちゃんがやってた剣道場の生徒なの。今はお母さんのよしのさんが引き継いでてね。つばき、こう見えてかなり強いんだよ？」

自慢げに言うなお。まるで自分のことのように話すその顔はどこか嬉しそうだ。そ

れとは真逆に遊ぼう遊ぼうとせがまれるつばきは子供たちに手を引っ張られてうんざりしたような顔になっている。

「そうだ、星空さんもよかったウチでご飯食べていきなよ。つばきも、どうせ今日さくらちゃんお出かけしてるでしょ?」
「なんと、お前さては超能力者か何かか」
「おねーちゃん、ちょーのーりょくしゃ?」
「んなわけないでしょ。さっき買い物してる時にバッタリ会ったの。てか、そのノリやめて。ウチの弟妹たちにうつってるでしょ」
「今度は病原菌扱いかよ・・・・」

どんな時でもこういうノリと扱われ方は変わらないんだなと軽く感心するみゆき。なおの「で、どうする?」の問いかけに少し遠慮がちに頷いて中へと入って行った。玄関で靴を脱ぐのだが、ここで彼女の家族の育ちの良さが窺える場面が。誰一人として、靴を脱ぎっぱなしにしないどころかみゆきやつばきの靴まで揃えて置いていく。それに驚きつつもなんだか微笑ましくなりながらつばきは居間へ、みゆきはなおと共に台所へと向かう。

必要な材料とそうでないものを分け、調理器具や調味料をそろえる。手際よく動くなおを後ろから見ていて感嘆の声をもらした。

「すごい…」

「お父さんとお母さん、町内会の集まりで出かけてて。それにこういうの結構好きだから。下の子たちのお弁当とか作ってたらいつの間にかね」

やよいといい、こう女子力の高い女の子が多いのはちょっと同じ女の子として負けた気分になるのはなんでだろうと軽く落ち込んでいると、スカートをちょんちょんと引っ張られる感覚に振り向く。「おねーちゃん、遊ぼ?」と言うのはひなとゆうただ。手をひかれ、連れていかれた先ではすでに汗を額に光らせているつばきの姿が。

・・・・いったいどんなハードな遊びをやってたんだ。

「おお来たか生贄よ」

「生け・・・・」

「次鬼ごっこやろ!」

なんとも子供らしい。少しウキウキするみゆきだが、隣をみるつばきの顔は険しいものへと変わっていることに気付く。

「ど、どうしたの?そんなコワイ顔して」

「いいかみゆき。この家の遊びはすべてにい置いてスタイリッシュかつワイルドなんだ。鬼ごっこだといってナメてかかるととんでもないことになるぞ?」

なにを言ってるんだこいつは。そんなニュアンスの視線を向けるとつばきは今度は引き攣った顔で指さす。そこには、おもちゃにされあれやこれやと投げられる哀れなゲキリュウケンの姿が。

「おまえもああなりたくなけりゃ全力で逃げろ。いいか?もう一度言っとく。この家の遊びは全てにおいてスタイリッシュかつワイルドだ」

「そんなことよりアレなんとかしようよ!?なに流暢に雰囲気出してやってるの!?」

《つばき、おいつばき!この子供たちをなんんとかしてくれ!》

「鬼ごっこ・・・・また恐ろしい企画を持ち出しやがって・・・・!」

「だから何言ってんの!?というか、なにその数々の修羅場を潜ってきたみたいな顔は!」

「逃げるぞ！」
「逃げるぞって、え、ゲキリュウケンは!?」
「ゲキリュウケン・・・・おまえの犠牲は無駄にしない・・・・！」

まるでどこぞの漫画の見せ場みたいなセリフと雰囲気を醸し出しながらみゆきの手を引いて立ち上がるつばき。そのことに先ほどのツッコミのテンションとはうって変って急に恥ずかしくなって顔を少し赤らめ俯く。父親以外に握った初めての男の手。少しごつごつしてて、大きいその手は、自分の手をすっぽりと隠すまではいかないまでも、大きく見えた。

「さらばだ相棒！」
《おのれつばきィィィィィィィ!!!》

いい雰囲気が、台無しである。

◇

それからキャンディがおもちゃにされたり、ゲキリュウケンを取り戻したりと色々あり昼食。冷めやらぬテンションはその瞬間まで続き、今は目の前の土手下の芝生の敷かれた遊び場で子供たちが仲良くサッカーをしているのを寝そべりながら見ている。ようやく訪れた穏やかな時間につばきは面一杯躰を伸ばす。並びはなお、みゆき、つばきの順だ。

「ごめんね二人とも。なんか色々と」
「そんなことないよ、こちらこそお昼ご飯ご馳走様」
「・・・・しっかしいつ見てもすげーよ。あんな沢山の兄弟いて、よくあれだけパワフルに動けたもんだ。さすがだな」
「大したことじゃないよ。一番上のお姉ちゃんだもん。それに、弟たちと一緒にいると楽しいし」

躰を起こして胡坐をかくように座る。見つめる視線の先には、楽しそうにはしゃぐ兄弟たちの姿が。

「あたし、家族が大好きなんだ。友達やクラスのみんなもだけど・・・・でも、やっぱり家族といると心が落ち着くっていうか」

そう話すなおの顔はどこまでも穏やかで。そんな彼女の横顔をみたみゆきはというと。

「勇気があって、かっこよくて、優しくって・・・・うんっ！やっぱり決まり！あのね、一緒にやってほしいことがあるの！」

立ち上がったみゆき。そこへあかねとやよいも合流し――――――なぜかサッカーをする羽目に。

「どうして・・・・って、これもなんかデジャビュ」

〔最初のも合わせて今日で3回目だな。面倒事に巻きこまれやすい体質だと言っていたが、どうやら本当みたいだな〕
「言わないでくれ、哀しくなる」
「よーし！俺たち家族の固い絆をみせてやる！」
「んな、ウチらかて、チームワークで負けへんでぇ！」

やる気のないつばきなど余所に盛り上がる一同。ボールをコートの中央の円に置き、なおとあかねがにらみ合う。静かな緊張感の中、なおが投げたコインが地面に着いた瞬間に二人が動き試合開始となる。

しかし、コインが落ちても試合が始まることはなかった。

突如としてうな垂れ始めたなお達。口々にマイナスの事ばかり言うその光景に4人は空を見上げた。さっきまでの晴れ晴れとした青空じゃない。心の中の黒い負の部分を無理くり引き出されるような居心地の悪いこの感覚。

「良い子はいねーがァ！」
「この前の赤鬼さん！」
「それを言うなら、泣く子はいねーがァ!?や」

関西人の性か、ツッコミをするあかね。それに反応したアカオーニが巨体をズシン、ズシンと揺らしながら此方に歩いてくる。手にした金棒を振りかざし、空を切るかのごとく振り下ろしてくる。

「ゲキリュウケン！」

つばきが腰だめに構え、ゲキリュウケンを実体化させて金棒を受け止めてから流し、横一閃に振りぬく。アカオーニはその巨体からは想像もできないようなステップで後方へと一旦さがる。

「みんな、プリキュアに変身して戦うクル！」
「やっぱり夢じゃなかったんだ…」
「怖いなら帰るか？」

つばきの言葉にやよいは首を振る。

「もう逃げないって決めたんだもん。私もやる！」
「みんながいる、だから大丈夫。行くよ！」

プリキュアとリュウケンドーに変身する。

「パー!?この前はチョキだったのに今度はパー!?負けたオニ！」

なにやら驚愕しているアカオーニ。見ると、ピースのじゃんけんがパーになっていることに気付く。

「今日のピカリンじゃんけんは、パーでした」
「すごいおもしろい！」
「キャンディはチョキだから勝ったクル！」

もう色々とツッコミが追いつかないと諦めるサニー。だが、これだけは拾わないわけにはいなかかった。

「それどのへんがチョキやねん！」
「もう怒ったオニ！出でよ、アカンベー！」

赤鼻を掲げ、サッカーゴールを媒体としてアカンベーを生み出すアカオーニ。
アカンベーは鳥のような形をしており、広げた大きな羽をはばたかせて空中へと上がる。くるりと方向変換し開いた頭部からは、数発のボールが打ち出されている。その弾道が行き着く先は――――なお達。それにいち早く回り込んだハッピーはスマイルパクトに気合いを入れ、ハッピーシャワーを照射。なんとかアカンベーの攻撃を阻止することに成功するが、それで身動きが取れなくなり煙を貫いて現れたアカンベーのネットに捕まりグルグルに丸められてしまう。それを追いかけ救出しようとするサニーとピースだが、攻撃しようと拳を振りかぶったところでハッピーを向けられ、攻撃に躊躇いができてしまう。そこを蹴り飛ばされ地面をバウンドし、土煙を上げて落下した。橋の上で満足そうにその様をみて笑うアカオーニ。

『空飛ぶなんてアリかよ！』
〔リュウケンドー、雷電武装だ。サンダーイーグルなら、奴と戦える！〕
『サンダーモードだな。よし！』

キーホルダーからサンダーキーをゲキリュウケンに装填し、サンダーモードへとチェンジする。そして新たにサンダーイーグル召喚の為のキーを装填し、呼び出したのは黄色の鷲。雄々しく咆哮を上げ、リュウケンドーの頭上を舞う。

『よっしゃ、行くぜ!』

サンダーイーグルが変形し、翼となってリュウケンドーと合体する。それを見たピースが「おぉ!!!」と興奮しながら見上げる。

「なんかかっこよくてずるいオニ!やれ、アカンベー!」

アカンベーが飛翔しサンダーウィングリュウケンドーを追う。高速で空を飛び回る二人は互いに牽制しあいながらも攻撃のチャンスを窺うが、空を飛べるという条件をクリアしただけでリュウケンドーにはアカンベーを攻撃することができない。ハッピーをまずは解放しなければと動くも、それをさせまいとアカンベーが逃げるのでそれもままならない。

歯がゆさがリュウケンドーの焦りを煽る。

「こんな奴ホッといておけばいいものをオニ」

「ほっとけるかい！ウチらの絆は・・・・まだ、出逢ってから日が浅いけど…これからもっと固くなるんや！」

「サニー…」

「絆・・・・」

呟いて、なおが起き上がる。

「何が絆オニ！仲間、家族。そんなものはいつかぜーんぶバラバラになるオニ。だったら今、全部バラバラにしてやるオニ。やれ、アカンベー！」

アカオーニの命令でリュウケンドーを置きかけていたアカンベーが突如方向をかえ、ピースとサニー向けてボールを放つ。だがそれは当てることを目的としていないことがすぐにわかったリュウケンドーはすぐさま方向変換。駆けるアカンベーよりも先に回り込み、アカンベーを真っ向から止める。

「リュウケンドー！」
「つばき君！」
「へ、つばきって、まさか!?ていうか、その声はあかねにやよいちゃんも!?」
『だぁ、もう正体バレてるし・・・・！』
「つばき！」
『ああそうだよ、つばきだよ・・・・っ、』

雄叫びと共に雷ほ放電しながらリュウケンドーはアカンベーを放り投げる。なんとか守ることには成功したが、今ので少し力を使いすぎたのか膝を着くと同時にサンダーモードもサンダーイーグルも消えてしまう。どうやらこの形態はエネルギーの消費が激しいようだ。
少し息を荒くするリュウケンドー。疲労も見える。そんな彼に再び向かってくるアカンベーに向け、なおは力の限りボールを蹴った。ボールは見事命中し、アカンベーを止めることに成功すると両手を広げ立ちふさがった。

『バカ、なにやってんだお前!?早く逃げろ！』

「逃げない！それに――――家族はバラバラになんかならない！永遠に無くならない！」

家族――――そのワードと共にフラッシュバックする忌々しい記憶。だがリュウケンドーは首を振ってそれを追い出し、立ち上がってなおの前に出る。

『さがれ…』

「つばき…そこをどいて。私にとってはあなたも家族みたいなものなんだ。もうこれ以上は――――」

『だったら、尚更きけねーな。家族だってんなら、俺にも守らせろよ』

ゲキリュウケンを構えるリュウケンドーを見て、一瞬目を閉じる。その背中に安堵を覚え、すくっていた僅かな恐怖心を払い、目を見開く。

「あんたたちがどこの誰かは知らないけど、家族の絆を断ち切ろうって言うんなら・・・・あたしが戦う！」

次の瞬間、光が弾けた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１７

光が瞬く。天高くそびえるかのようなその緑色に発光する柱の中で生まれた存在に、アカオーニは一種の恐怖すら感じる。驚愕とともにその内部を手で遮った瞳でしっかりと見つめる。やがて慣れた先で見えたのは、一つのシルエット。

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ！」

そして、さらにもう一つ。

『ストームキー、発動！』

〔チェンジ。ストームリュウケンドー〕

『疾風武装！』

緑色の鍵であるストームキーをゲキリュウケンに装填しすると、魔力でできた緑色の

竜がアカンベー目掛けて突撃し、その際に拘束されていたハッピーを解放する。轢かれたアカンベーは尻もちをついて倒れ、アカンベーを轢いた竜はそのまま鉄橋の下を潜り抜け、空高く舞った後にリュウケンドーへと降り注いだ。魔力が変換され鎧となり、緑色でできた、風をモチーフとした雲のような装飾が備わる。

『ストームリュウケンドー、来迅!』

「おぉぉ～…なにコレ、どうなってんの?キュアマーチって・・・・」

「キュアマーチ・・・・やっぱり４人目は緑川さんだったんだ!」

『マジかよ』とマーチに変身したなおを見てこぼすリュウケンドー。同じように、リュウケンドーとなっているつばきを見て改めてリアクションするマーチ。

「また増えたオニ…!」

　忌々しそうにつぶやくアカオーニ。人質を解放され、あわやプリキュアの覚醒。あと一歩というところでこんなどんでん返しがあろうとは誰も予想などできないことではあるが、アカオーニにとってはそんなことはフォローにもならない。

いや、そもそも彼にフォローなんてことは必要ないのかもしれないが。

「アカンベーー!」

アカンベーに指示を出す。倒れていたアカンベーがむくりと起き上がり、両腕の羽を広げて飛び立つ。

「大切な家族の絆・・・・守ってみせる!」

『そう熱くなんなって。もうちょいクールにいこうぜ・・・・って、聞いてないか』

目にも留まらぬ速さで駆け抜けるマーチ。彼女が走り抜けた後にはその勢いの副作用か、はたまたその形容しがたい髪型のせい・・・・仮にトリプルテールとでも言っておこうか。そのどちらのものによるものかはわからないが、ソニックムーブのような現象が発生する。その風に煽られてアカンベーは空中で踏ん張れるはずもなく飛ばされる。なんとか体勢を立て直すも、走っただけでこれなのだからすさまじい。

が、ここで問題が発生する。マーチの頭の中では、アカンベーを真っ向から迎え撃ち、キックでもパンチでもして攻撃するつもりであったのだろうが変身したばかりで能力

の制御が上手くいかずにアカンベーを通り越してしまう。足を止めてブレーキをかけるも生憎と下は芝生。急に止まれるはずもなくズザザザと音を立てながらどんどん距離は開いていき、その眼前には鉄橋を支えるコンクリートの柱が。

「危ない！」

ハッピーが叫び、ピースが顔を手で覆い、サニーが手を伸ばすもそれは届くはずもない。

『世話が焼けるな・・・・』

そう呟きが聞こえた時にまたあの突風が吹き荒れる。直後、ドン！という音が鳴り、煙が立ち込める。

「ど、どどどどうしよ～!?」

「お、おおお落ち着くんやハッピー！」

「そうだよ！まずは救急車を・・・・」

「救急車なんて来ないクル！」

軽くパニックになる三人に珍しくツッコミを入れるキャンディ。宥めようとあたふたしているところへ、声が聞こえた。

『ったく、制御もまだロクにできねーんだからはしゃぐな。みっともない』
「ごめん・・・・って、なにしてんのさ!?」

自分がリュウケンドーに抱きかかえられているのを見て顔を真っ赤にするマーチ。いわゆる、お姫様抱っこというやつである。

「羨ましいかも・・・・」
「ハッピー?」
「女の子の憧れだよ!お姫様抱っこだよ!?いいなぁ～…」

心底羨ましそうな顔で言うハッピー。まったく緊張感のない奴らだとサニーは呆れ、ハッピー同様――――いや、それ以上の目でみるピースを見てまた「やれやれ」と呟く。

『ごちゃごちゃ言うな。ホラ、行くぞマーチ』

「ふぇ、う、うん！」

マーチをおろしてアカンベーが頭の砲門から攻撃を撃ってくるのが見えた二人は即座にその場から消える。速すぎるそのスピードにアカンベーは標的を捉えることができずにただただ無駄玉を撃ちまくる。

「さっきは失敗しちゃったけど、今度は・・・・！」

素早く方向を変え、鉄橋の柱を駆けあがりアカンベーの頭上へと跳躍する。落下する勢いを利用し振り上げる足から繰り出されるのは踵落としだ。それがものの見事に命中し、アカンベーは顔面から地面へと落下した。

なんとか起き上がるアカンベー。だが、その先にはリュウケンドーが。

『これで！』

剣を振るう。目で追えない程の速さで繰り出されるその斬撃はアカンベーの羽と

なっていたゴールネットをバラバラに切り裂き、飛行不能にしてしまう。それにアカオーニが「キィィィ！」と黒板を引っ掻いたような声を上げるがもう遅い。完全に形勢は逆転しもう勝利のしょの字も見えない。

「二人でアカンベーを浄化するクル！」

〔キュアマーチ、スマイルパクトに力を籠めろ！〕

キャンディのゲキリュウケンに促されて言われるがままスマイルパクトに触れる。するとパクトが緑色の光を発光、それを吸収するかのように輝きだす。それに比例するかのようにしてだんだんと力が抜けていくマーチだがキャンディの「やめちゃだめクル！もっと力を籠めるクル！」という声に従って力を送るイメージを脳内でする。するとより一層光が強いものへと変わっていった。

〔こっちもやるぞ！〕

『ああ。ファイナルキー、発動！』

〔ファイナルクラッシュ。疾風斬り〕

「プリキュア・マーチシュートォ！」

マーチが緑色でできたエネルギーの球を蹴る。それがゲキリュウケンへと当り、刀身を輝かせた得物を手に、リュウケンドーが駆ける。

『剣士、魔弾龍、戦士。三つの力を今一つに！三位一体！疾風斬り！』

一気に加速し、アカンベーが目の前に来たと認識するよりも早くすれ違い様にゲキリュウケンを振りぬく。浄化の光を纏った剣はアカンベーを浄化し、赤鼻を元のキュアデコルへと変えた。

『闇に抱かれて眠れ・・・・』

「ハァ…ハァ…なにコレ、パワー全部使い果たしたって感じ…」

倒れそうになるマーチ。それをリュウケンドーがすばやくキャッチして立て直す。ありがとうと御礼を言おうとするマーチだが、先ほどの事を思い出してしまい上手く喋ることができないで俯く。それをみて首を傾げるリュウケンドー。

「アイタタタ、尻もちついちゃったからパンツ破けたオニ」
『鬼のパンツって破けるもんだっけか？』
「プリキュア、リュウケンドー！覚えておくオニ！」
『って、おい！・・・・あ、なんかこの扱いデジャビュ』

◇

気が付けばあたりはすっかり夕暮れとなっていた。さっきまで絶望に沈んでいたなおの兄弟たちももうすっかり元通りになり、今では元気にサッカーそしている。そんな様子を土手から見下ろしながら、一件落着と息をついた。

「あ、あのね緑川さん…」

「なおでいいよ」

「――――なおちゃん、改めて私たちと」

どこか気まずそうに言うみゆき。それもそうだ。さっきはあんな恐い思いをして、結果オーライにはなったものの巻き込まれたことは事実。プリキュアになったからといって断られても文句の言いようがない。あかねややよいが快諾してくれたことがほぼ奇跡みたいなものだとみゆきは思う。なおの場合は家族が巻き込まれた。あと一歩間違えていたらと思うとゾッとする。

しかし、なおは笑顔で言った。

「みゆきちゃん。私たち、良いチームになりそうだね」

その一言に「え？」となる。断られるとばかり思っていたからだ。

「家族を守ろうとしてくれてありがとう。それに、なんだかみんなといると楽しいし！」

そう言ってハニカムなおの笑顔は、同じ女の子であるみゆきもどこかキュンとするほどにいい笑顔だった。

「・・・・なにはともあれ、これで４人目だな」
「え、いいのつばき君？」
「どーせプリキュア５人集めなきゃいけないんだったらおんなじことだよ。それに、こうなった以上は入ってもらわないと困るのはこっちだしな」
「相変わらず素直じゃないね」
「ほっとけ」

やよいに言われてそっぽを向くつばき。直後、「危ない！」という声が聞こえてきて何事かと振り返ると視界が黒くなったとおもいきや顔面にめり込むボール。サッカーボールが綺麗につばきの顔面にクリーンヒットし、そのまま倒れる。

「やっべ、シショーに当った！」
「お～まぁ～え～らァ！」

起きあがるなり鬼の形相で追いかけまわすつばき。しばしの間、グラウンドには明るい笑い声が響き渡っていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１８

この世の不幸という不幸を詰め込んだ空間。ありとあらゆる希望が絶望へときすその世界はバッドエンド王国と呼ばれる場所だ。プリキュアとリュウケンドーが戦っているウルフルンやアカオーニもこの空間に住んでいる。

そして、彼らと立場を同じくする人物が一人。大きな壺を鍋に見立ててその中の液体をぐつぐつと煮込みながら怪しげな笑いを浮かべる老婆。身長はキャンディと変わらないでも、纏う雰囲気はまさに幹部といっても差支えない。

「ウルフルンもアカオーニも使えない奴らだワサ…」

同僚にたいしての悪態をつきながらも、笑い声はどこか嬉しそうに聞こえる。

「いよいよこのマジョリーナ様の出番だワサ！」

高笑いをしながら鍋の中から浮かんできたリンゴを指えつまみ上げる。老婆の名前はマジョリーナ。バッドエンド王国3幹部の一人にして、頭脳派である。

◇

「「ちいこおくうだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」
「また同じこと言ってるクル」
「そんなことないもん、はっぷっぷ～」
「だいたいお前があんな時間に電話してくるからだろうが！」
「だってなおちゃんが入ってくれたおかげで４人になったんだよ!?こんなウルトラハッピーなことはないよぉ！」
「俺はウルトラアンハッピーだけどな！」
〔このやり取り何回目だ…〕
「えっと・・・・６回目クル！」

数えてたのかと軽くキャンディに感心するゲキリュウケン。まったくこの二人は仲が悪いのか良いのかがイマイチよくわからない。人間という生き物はつくづく不思議だと思いながら二人が校門を潜ったところで黙り込む。

「――――わ～、綺麗！」

みゆきが立ち止まり花壇の花をみて言う。花なんていつも見てるだろと言いたいところだが、彼女には彼女なりの感性があるのでここは黙っておく。しゃがんで目をキラキラさせるみゆきのその横顔が、不覚にもかわいいと思ってしまったつばきは慌ててソッポを向く。と、視線の先に見かけたのは我がクラスの委員長である青木れいかだった。

「あ、青木さん！」

花壇に水を撒く姿も絵になる。美人とはこういう女の子のことをいうのではないだろうか。

「青木さん綺麗！まるで水の妖精さんみたい！」
「恥ずかしいセリフ禁止！」

　みゆきの言葉に被せるようにしてツッコミをいれて頭を軽く小突く。しかしそれがどうやら痛かったらしく、目じりに涙を僅かに浮かべて頭を押さえながらつばきを見る。

「こら鳴神君。いけませんよ人をむやみやたらに殴っては」
「へいへい」
「～…この花壇、青木さんが手入れしてるの？」
「はい。お花が大好きなので」
「相変わらずもの好きだよなぁ。誰に頼まれた訳でもないのに」
「あら、それを言うなら鳴神君もではないですか？最近、なおや星空さん達とよく一緒にいるところを目にします。いい傾向でなによりです」
「いやぁ、それはだな・・・・」

言いかけて、予鈴がなる。そこで今遅刻寸前だったことを思い出し慌てて駆けだすつばき。

「なにやってんだ行くぞ〝れいか〟！」

如雨露を置いてから行こうとしたれいか。しかしつばきに手を引かれて如雨露を落としてしまう。が、今彼女が驚いているのはそこではない。今まで苗字でしか呼ばなかった彼が自分のことを名前で呼んだからだ。

つばきが他人の、自分と距離感が比較的近い人間の名前を呼ぶときは必ず苗字で呼んでいる。小さい頃は名前で呼んでいた時もあったが、この学校に入ってからは苗字で呼ばれている。それはひとえに〝つばきが距離を置いているからだ〟。これは一年の時も徹底されていたし、比較的距離感の近いと思っていたやよいでさえそうだったのだから間違いない。

が、今彼は間違いなく自分の事をれいかと呼んだ。そしてしかも――――手まで握られている。このことから彼の中で何かが大きく変わってきていることが窺える。

一体彼がどうしてここまで変わったのはかはわからないが、おそらくその中心には今つばきの隣を走っているみゆきがいるのだろうと推測してみる。

それがなんだか嬉しくもあり、少し悔しい気持ちでもあった。

◇

「ご馳走様〜！」
「…って、何してんのつばき」
「いや、昨日のあの二人組が来ないかと警戒を・・・・」
「用心深じゃなくて、それじゃ怪しい人だよ」
「なんだと!?みゆき、お前こそ今日ずっとれいかのこと見つめてたじゃないか。時々溜息なんかついたりして！」
「マジか!?」
「言っておくけど、私ソッチじゃないからね」

即座に否定されたことに心底残念そうにするつばき。いったい何を期待してたんだと言いたいところだが、それはこの際どうでもいい。重要なことを言わなければと咳払いを一つする。

「みんな、私ね、５人目のプリキュア見つけちゃったかも！」

食いつく3人。「まさか…」とこぼすつばき。

「5人目のプリキュアはぁ、責任感があって、賢くって、優しくって、水の妖精さんみたいな人～」

「よし、全部ハズレてるな。特に二つ目なんかここにいる奴らこの前のテストの点数壊滅的だったし」

「やかましい！」

「あべし！」

あかねのハリセンが今日も唸る。満足そうに頷いてから叩かれて伸びているつばきを放置してみゆきに向き直る。

「水の妖精さんはともかくとして、これに当てはまる人物っていったい・・・・？」

◇

静まり返る場内。水の滴る音さえ聞こえてきそうなそんな厳かな雰囲気の包む静寂の中、一人少女が弓を構えて佇む。綺麗な姿勢で構えた弓を胸の前までおろし、弦を弾く。射った矢はまっすぐにぶれることなく的に命中し、ど真ん中に突き刺さった。

「なるほど、確かにれいかなら頭もいいし」
「頼りがいがあるし」
「つばき君にも優しいし、ぴったり！」

「おいちょっと待て、なんだ最後の」

休憩時間を見計らって話をする時間を何とか作ってもらった。弓道部に生徒会のかけもちは時間もかなり限られている為、れいかはかなり忙しい。それを踏まえればプリキュアなんてやってる暇も余裕もなさそうではあるが、物は試しだと言ってきかないみゆきを諦めなぜか一緒に頼みこむはめに。

事のいきさつ、あらすじを簡単に説明し終えるころにはもう足が限界に達していた。みゆきが最後の気力を振り絞るように言う。

「と言うわけで青木さん。お願いします！」

「おねしゃ～す」

つばきのなんともやる気のない声が後に続く。これだけの時間正座しているにも関わらず足のしびれどころか顔色一つ変えないところをみるとさすがは剣道場の息子といったところか。

「伝説の戦士、プリキュアにリュウケンドーですか・・・にわかに信じがたい話ではあ

りますが、みなさんが嘘をついているようにも見えませんし・・・・」
「嘘やないって！」
「そうだよ！私たち、ホントにスーパーヒーローなんだから！」

ヒーローではないだろうとツッコミを入れるあかね。そして物は試しだとまた言ったみゆきはつばきを見る。キャンディをだしたところで新手のおもちゃかなにかと思われると思ったのだろう。仕方ないと溜息をついて立ち上がる。

「ゲキリュウケン！」

相棒の名前を口にして戦闘形態へと変える。それをみて「おお」と驚くれいか。でがここまでならマジックかなにかと思われるだろうともうひと押しどばかりに視線でつばきに合図を送る。いやいやながらもつばきはリュウケンキーを取り出した。

「リュウケンキー、発動！」
〔チェンジ、リュウケンドー〕
「ゲキリュウ変身！」

そして、リュウケンドーへと姿を変えた。

「こ、これは・・・・！」
「ね、信じてもらえた!?」
「不思議なことが起きているのは、間違いないみたいですね…」
「だからお願い、私たちと一緒にプリキュアやってください！」

証拠を見せられたれいかは考えるように黙る。「もしかしてこのままとんとん拍子に5人目か!?」とつばき――――リュウケンドーも期待を持つ。

そして。

「・・・・折角のお誘いですが、お断りさせていただきます」
「うん！――――って、」
『「「「「えぇ～!?」」」」』

Ｅｐｉｓｏｄｅ１９

「どうしてこうなった・・・・」

　溜息をつきながら鋏を縦横ななめに動かすつばき。チョキチョキと規則正しいリズムで動いている音を聴けば手先の器用さがうかがえるものだが、とうの本人はやる気ほぼゼロ。悪態をつきながらも仕方がないと言い聞かせて手を動かす。

　もちろん、口もだ。

「だいたいみゆきも人が良すぎる！これ生徒会の仕事だろ？なんで俺まで・・・・」

「とかなんとか言いながら手伝ってるじゃん。つばき君も案外ノリノリでしょ？」

「んなわけあるか。俺変身してまで頼んだのにノーだったんだぞ？恩を売ったところではいわかりましたってなるわけが・・・・」

「そんなんじゃないよ。私はただ、来てくれた人とやってるみんなが笑顔になれたらいいって思っただけ」

「・・・・それだけか？」
「それだけだよ」

そう、こういうところだ。こういう有無を言わせず自分のペースに巻き込んでいくところがあるから此奴は始末におけないとつばきは思う。結局のところ、帰ろうとしたところを強引に引き留められてここにいるわけだが、今では自分からせっせと作業を手伝うようにまでなっている。以前、ゲキリュウケンが言っていた〔星空みゆき、彼女には魔力とは違う不思議なパワーを感じる〕と言っていたがこういうところなのだろう。
強引に、でもイヤイヤにさせない、そんな不思議と居心地のいい感覚。なんとも理解不能な奴だ。
ふと、昔のことを思い出す。

「そういや、小さい頃に行った図書館でヘンな奴に逢ったっけ」
「ヘンな奴？」
「ああ。一人で本読んでたら急に話しかけられてさ。返事したら逃げてくからついてってどうして逃げるのかって訊いたら、また黙りこくってどっか行っちまってな？でもその後道場に見学来ててさ。結局一回も話すことなくてそれから一度も逢ってなかった

んだけど・・・・ソイツもよく読んでたなぁ、たしか白雪姫とシンデレラ・・・・だっけ」

独り言のように呟いて作業に戻るつばき。それにやよいとれいかが記憶の奥底を漁る。幼馴染である二人ならきっとどこかで自分達も逢っているかもしれない思い思考の海を探索するも、結局答えはでないままで作業に戻ることとする。

（図書館・・・・まさか、ね）

一瞬何かを思い出しかけたが、今はそれどころではないと思考を瞬時に切り替える。れいかと題材に使う白雪姫の絵本を元に案を練るみゆきはとても楽しそうに笑っていた。

ほどなくして、生徒会＋みゆき達による白雪姫は完成した。どのパートを誰が担当したのか一目瞭然で、それぞれ渾身の出来だと互いを労う。やよいはキャラクターと背景の絵を、あかねが紙ふぶき全般で、なおとつばきが画用紙や段ボール等で作った小道具類、そして段取りやセリフなどは生徒会メンバーとみゆきによるものだ。

「俺の鋏捌きもなかなかのモンだろ？」

一人外れて完成した備品に魅入っているれいかの横にしゃがんでどうだといわんばかりに一つ手に取る。

「・・・・そうですね。本当に素晴らしい出来です」

白雪姫のキャラクターパネルをそっと撫でて呟くれいか。

「…たまには悪くないもんだな。こういうの」
「皆さんと居る時は、いつもこんな感じではないのですか？」
「まぁ大体あってる。みゆきがいっつも何かに首突っ込んでは巻き込まれてるって感じでな。おかげで白髪ができたような気がするよ」
「フフフ・・・・でも、とっても楽しそうですよ？近頃は」
「・・・・おまえも居てくれたら、もっと楽しいんだろうな。また、昔みたいに」

ふっとでてきた言葉にれいかは驚いて、そして少し気恥ずかしくてつばきを見る。そ

の横顔は、どこか懐かしむように大人びて見えていた。

「…なんてな。ま、気が向いたらおまえも来いよ。いつも俺ら、中庭のあの場所で飯食ってるからさ。騒がしいけど、まぁ案外楽しいぜ」

そう言って立ち上がり鞄を担ぐつばき。「もう帰るの？」というなおの言葉につばきは振り向きもせずに時計を指さす。見ると、とうに完全下校時刻は過ぎていた。その為揃って慌てて出ていく。れいかも遅れないようにと鞄を手に生徒会室を出ていこうとする。

「…また、昔みたいに・・・・か」

振り返って一言そう呟いてから、ドアを閉め、鍵をかけた。

◇

そして、公演当日。近所の小学校の体育館を借りての読み聞かせ。会場であるステージ前にはそこそこ大人数の小学校低学年の子供たちが集まって座っている。袖口でその様子を見ていたみゆきはガッチガチに緊張し、今にも「帰りたい」とか言い出しそうなかんじだが、ここでそうしないのは彼女なりの責任感と「やり遂げたい」という気持ちなのだろう。そして、それ以上に自分も今日と言う日を楽しみにしていたからというのもあるのかもしれない。

「さ、そろそろ始まるよ！」

なおの号令とともにれいか達がステージに出てくる。それに合わせて背景と小道具類をセッティングし、その間れいかが時間を繋ぐ。

「本日は読み聞かせ会にお越しいただき、ありがとうございます。最後までお楽しみく

ださい」

大きな拍手とともに3人が席に着き、それと同時にみゆき、やよい、つばきの配置も完了しいよいよスタートとなる。

進行は至って順調だ。なんのトラブルもなく、読む側も、演出側も、そして観客側も、誰もが白雪姫の世界観を楽しんでいる。が、問題はいつ何時起こるかわからない。例えば――――そう、〝そこにいるはずのないキャストが登場する〟とか。

袖口から、誰かが歩いてくる。よく見ると緑色の怪しげな服装をした老婆だ。引き笑いを浮かべ、いかにも悪役の魔女といった雰囲気を醸し出している。演出としてはかなりいいが、生憎とこの人物が出てくることなどこの場にいる全員が知らない。ましてやこれは自分たちだけで作った作品で、第三者が介入してくるなどありえない。

「誰?あの人」

「ってか自分で毒りんごって言ってもうとるし」

「どこからどう見てもあれ普通のりんごだよね」

「・・・・いや、違う」

「違うって、まさかホンマに毒りんごとか言うんとちゃうか?」

「そうじゃない。アレは――――」
「――――保護者の方ですか？席に案内します」

　席を立ち歩み寄って手を差し出すれいか。が、それは払われ、そのことがつばきの違和感を確信にかえる。

「白雪姫が幸せになるなんてウソだワサ。ホントはみんなバッドエンドだワサ！」
「マズい、みんな、逃げ――――」
「世界よ、最悪の結末バッドエンドに染まるだワサ。白紙の未来を黒く塗りつぶすだワサ！」

　つばきが避難を告げるよりもはやく世界はバッドエンド空間へと染まる。希望も、夢も、何もかもが崩れて失意と絶望に支配される。

「こんなことしても、なんの意味もありません・・・・」
「れいか！」
「この展開・・・・まさかお前、あの狼たちと同類か！」

「フヒヒヒヒ、私の名前はマジョリーナ。バッドエンド王国の魔女だワサ」
「バッドエンド王国!?」
〔メルヘンランドに攻め入った奴らの総称で、奴らの国だ。今、メルヘンランドもこの空間と同じ状況に変えられる寸前なんだ〕
「そんなの・・・・絶対にゆるさない！行くよ、みんな！」

――――ｒｅａｄｙ!?　ｌｅｎ，ｔ　ｇｏ！

「ゲキリュウ変身！」

まばゆい光が５人を包み、戦士と剣士へと変える。

『リュウケンドー、来迅！以下省略！』
「っちょ、名乗りやらせてよぉ！」
「そうだよ！ヒーローに名乗りは必要不可欠だよ！」
『やかましい！ンな悠長なこと言ってる場合じゃないだろ』

そうだった、とマジョリーナに向き直る。が、なんだか言いくるめられたきがしてならないハッピーとピースは半ば納得のいかないまま構える。

「愉快だワサ。だが今までのようにはいかないだワサ！出でよアカンベー！」

確固たる自信がるのか、そう言い放ちアカンベーを召喚する。媒体は鏡の絵が描かれたパネルで、アカンベーも鏡でできている。頭にリボンが付いているあたり少々拍子抜け感じもするが、それでも相手はアカンベーで先ほどのマジョリーナの言葉もある。油断は禁物とリュウケンドーは愛刀を構えた。

「鏡の力を見せるだワサ！」

マジョリーナの指示でアカンベーが・・・増殖した。５人を取り囲むようにして立っている。

「その中に本物のアカンベーは一体だけ。お前たちにわかるかな!?」

『ハッ、こんな子供だましに誰が引っかかるかっての。テメーの狙いは俺たちをバテさ

せてから叩く気だろうが、そうはいか――――――――』
「プリキュア・ハッピーシャワー！」
『――――って、学習能力ゼロかお前らはァ!?』

浄化技＝エネルギー切れを意味するということを完全に忘れアカンベーに連発するプリキュア。案の定、本体に当ることなく分身ばかりを捉えてしまい、疲れ果てて床にヘタレこんでしまう。

『お前らな～！』
「ハッハッハッ！こいつは傑作だワサ！さぁリュウケンドー、残るはお前だけだワサ。やれアカンベー！」
『そうはいくか！』

ゲキリュウケンを振りかぶり、回転するようにして振りぬく。鋭い太刀筋は一斉に襲い掛かってきたアカンベー達をその斬撃により消滅させていく。

『一体一体じゃ無理でも、纏めてやれば・・・・！』

「そいつはどうかな？」

にやりとマジョリーナが笑う。消えたアカンベーは・・・５体。つまり、全て偽物。本物など、さいしょから混ざっていなかったのだ。だが、いつからだ？いつからすり替わった？

〔リュウケンドー、上だ！〕

ゲキリュウケンの警告。しかしながらそれも間に合うはずもなく、アカンベーの拳はプリキュアとリュウケンドーを捉えた。

「他愛もない・・・・ん？」

落ちてきた白雪姫のパネルを見下ろすマジョリーナ。こんなもので人間は笑顔になる。全く持って理解できない。忌々しい。

だから。

「こんなもの、なんの意味があるだワサ」

踏み潰す。ぐしゃりと歪んでせっかくの備品が使い物にならなくなってしまった。

『――――ッ！』

「これは、いったい・・・・？」

見れば、れいかが正気を取り戻して困惑している。いったいなにがきっかけでそうなったかは知らないが、このままでは危険だ。

「アンタかい？絵本の読み聞かせ会なんてしてるのは…？」

そしてマジョリーナの注意がれいかへと向く。

「よくもまぁそんなそんな無駄なことができるだワサ。おまけにこんなくだらない人形まで作って、チャンチャラおかしいだワサ！」

足元に落ちていた白雪姫のイラストを蹴りあげる。床に転がり、虚しく落ちた。

――――たまには悪くないもんだな。こういうのも。

――――青木さん、明日来るみんなをウルトラハッピーにしようよ！

――――おまえも居てくれたら、もっと楽しいんだろうな。また、昔みたいに・・・・

拾い上げ、見つめるれいか。怒りと、悲しみとが混ざり合い、キッと睨み据える。立ち上がろうと足に力を入れた瞬間、声が響いた。

『くだならい…そうだな、俺も最初はそうだったよ。でもな、此奴ら、本当に楽しそうに笑いながら作業するんだよ。無駄だと思うけどさ…でも、此奴らやここにいる子供たちにとっては、一番楽しみにしていたことなんだ。それを・・・・こんなことの為にぶち壊してさァ・・・・久しぶりに頭に来たぜ、クソババァ！』

怒りに震えながら立ち上がるリュウケンドー。その背中を見て、れいかはステージから跳び、彼の前へと出る。

『バッ、おまえ何やってんだ!?逃げろ!』
「・・・・あなた方がどこの誰かは存じ上げませんが、今すぐお引き取り願います・・・・!」
「いきなりしゃしゃり出てきて、なんなんだお前は!?」
「私は、この七色が丘中学校生徒会副会長、青木れいか。あなた方の校内での乱暴なふるまい、背板会副会長として見過ごせません・・・・いいえ、私青木れいかが、許しません!」
「何を小癪な・・・・!」
『・・・・・ハハ。ったく、ホント律儀なやつだよなお前』
「鳴神君…?」
『昔っからそういうとこ変わんねーな。おせっかいでしつこくってさ』
「・・・・そうですね。でも、これは私も頭にきました」
『逃げろって言っても逃げないんだろ?だったら――――覚悟決めろ』
「覚悟なら、もうできています。私の友人を傷つけたこと・・・・絶対に、許しません!」

瞬間、光が弾けた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２０

「深々と降り積もる、清き心。キュアビューティ！」

青いフォルムにヘアー。まさにみゆきの言っていた通り、青木れいかは見事に５人目のプリキュアとして覚醒した。そしてリュウケンドーも新しいマダンキーを手に入れる。

「キュアビューティって、なんですかこれは!?」

『説明はした、来るぞ！』

リュウケンドーの警告に耳を傾け、マジョリーナの指示を得て今まで止まっていたアカンベーが行動を開始する。

『ジャンプだ！』

咄嗟の指示にビューティはリュウケンドーと共に跳躍する。分身したアカンベーの攻撃を躱し、二人を追いかけてアカンベーも跳躍する。二人を取り囲むようにして包囲するアカンベー。この中に本物は一体だけだが、ビューティは少しの間思考すると内一体に回し蹴りを入れる。それがクリーンヒットし、見事本物を攻撃した。そのおかげで周囲の分身は消え、着地するころには跡形もなくいなくなっていた。

――――――少しはできるだワサ・・・・！

まだ敗北と決まったわけではない。だが、ほかの二人はこの後先ほどのような浄化技でアカンベーを消滅させられている。なら、打つ手は一つ。

「こうなれば・・・・アカンベー、逃げるだワサ！」

「あ、逃げよった！」

敵前逃亡とは潔い。が、そう簡単に逃がすわけにもいかない。

「リュウケンドー、切り札は!?」
『ああ、ちゃんと持ってるぜ。アクアキー、発動！』
〔チェンジ、アクアリュウケンドー〕
『氷結武装！――――アクアリュウケンドー、来迅！』
〔アクアシャークで追いかけるぞ！〕
『よし・・・シャークキー、発動！出でよアクアシャーク！』

アクアリュウケンドーが獣王アクアシャークを召喚する。青い魔法陣のようなものから現れたアクアシャークはその身を変形させ、さながらボードのようなものへと変わる。リュウケンドーはそれに飛び乗り、ビューティの前まで降りてくる。

『行くぞ、ビューティ』
「はい！」

差し出された手をビューティが握る。リュウケンドーがキュアビューティを引き上げて乗せ、アクアシャークを発進させる。体育館からでたアカンベーとマジョリーナは校庭を横断中だ。このままでは取り逃がしてしまう。そうなれば、また別の場所でバッ

ドエナジーを集めるに違いない。

『絶対に逃がすか！』

〔三位一体攻撃で一気に倒す！〕

『ああ。ビューティ、浄化技だ！』

「はい。参ります！――――――プリキュア・ビューティブリザード！」

浄化のエネルギーがゲキリュウケンへと宿り、刀身を青く光らせる。

『ファイナルキー、発動！』

〔ファイナルクラッシュ。氷結斬り〕

『剣士、魔弾龍、戦士。三つの力を今、一つに！三位一体・氷結斬り！』

エネルギーを纏ったゲキリュウケンを振りぬくと、そこから放たれた青い光が一直線に伸び、アカンベーを飲み込む。作戦が失敗したと確認した後のマジョリーナの行動は迅速で、すぐさま退散し、空間も元の光りを取り戻した。

『闇に抱かれて眠れ・・・・』

◇

それから、壊されたものも元に戻り読み聞かせ会は最初からスタート。進行はなんら問題なく、見に来ていた子供たちも披露したみゆき達も無事、笑顔に終わった。

外はすっかり陽も傾き、辺りはオレンジ色に変わっている。帰っていく子供たちの見送りも終わり、一息つく。

「一時はどうなることかと思ったけど、無事終わってよかった」

「せやな」

「うんうん」

なお、あかね、やよいと頷く。

「皆さん、今日は本当に、ありがとうございました」

振り返って感謝の意と共に頭を下げるれいか。

「いや、私たちは別になにも…」

「・・・・なぁ、れいか」

「はい？」

「今日、楽しかったか？」

つばきの言葉に全員の視線がれいかに集まる。

「・・・・少し、恐かったです。でも、同時にわかりました。私にも、やれることがあるのだと」

「・・・また、いや、あれ以上に恐いめにあうかもしれないぞ?」
「大丈夫です。・・・・皆さんとなら、乗り越えられる気がしますから。それに、あなたも一緒なら、尚更」
「そ、そうか・・・・」

れいかの笑顔に照れくさくなりソッポを向く。それに対しあかねが茶々を入れ、便乗したなおがさらに盛り上げる。ワーワーと騒ぐ5人を見て、れいかはまた笑った。

「…あの、先ほどお断りした件ですが、よろしければ私も――――」
「何言ってんだよ。こっちは最初っからそのつもりだったんだ。拒否なんてするわけねーだろ。な?」
「うん!それに私、青木さんの事――――れいかちゃんのこと、大好きだから!」
「星空さん・・・・私も、みゆきさん達のことが、大好きです!」
「ハイ、れいかさんからの大好きいただきました〜」
「コラ!折角いい話で終わるところだったのにぃ」

つばきのボケにやよいが珍しくツッコミをいれ、それがおかしくてみんなで笑う。

何はともあれプリキュア５人と魔弾剣士が無事揃った。これで終わりではなく、ようやくスタート。だが、それはまた後の話であり、今はこの瞬間を互いに笑顔で過ごした・・・・。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２１

その日はよく晴れた休日だった。いつものごとくつばきが惰眠をむさぼっていると、一本の電話が入った。携帯電話のディスプレイを見て見れば、〝星空みゆき〟と書かれている。

面倒くさい。思考するまでもなく脳内がその答えを弾きだして居留守の為に布団の中へともぐりこむ。今までの疲れもとり切れていないのか、温い布団の温度は徐々に失いかけていた睡魔を復活させていきつばきの意識を飲み込んでいく。

――――あぁ、この瞬間が一番幸せだ。

ウトウトと寝息を次第に立て始める。やがて全ての感覚が感じられなくなり不思議な浮遊感に包まれて夢の中へ・・・・

「あ～、やっぱり寝てる！」

「やよいの言った通りやな」

「つばき君が面倒事避ける時は大体こんな感じなの」

旅立てなかった。

◇

「「「「祝、全員集合〜！」」」」」
「クル〜！」

綺麗にハモった声で久寿玉の紐を轢けば、中からキャンディがつるされて落ちてくる。垂れ幕には〝祝・せいぞろい〟と書いてあり、どうやらこの為にここに来たらしい。

「つか何でウチなんだよ。それからキャンディ、おまえまさかここに来るまでずっとそ

こにいたのか。軽く感心するわ」
「だって電話しても来る保証なんてないじゃん。つばきってばこういうの一切顔出さないし」
「それで、ここにしようというやよいさんの提案で来ました。あ、ちなみによしのさんやさくらさんにも了承は得ております」

　みんなグルかよと項垂れながらこぼす。パジャマから仕方なく私服に着替え、今いるのはベッドの上だ。テーブルにはさすがに窮屈なので座れない。自分の部屋に妹と母親以外の女の子がいる、という時点では普通に喜べるのだろうがつばきにとっては休日の二度寝を邪魔された忌々しい存在でしかない。追い出そうにも家族にヘンな目で見られることを考慮すればそう易々と取れる手段でもないためなにもできずにいた。

「では質問です。プリキュアとは、なんですか？」
「伝説の戦士クル」
「はいは～い。どうして皆さんは僕の休日ライフをこぞって邪魔しにくるのかなぁ？」
「アンタは黙っとき！」
「解せない・・・・」

この部屋の主はあっという間に占拠され、今ではベッドの上でうな垂れるしかない。
れいかをかわきりに始まったキャンディへの質問。これからのこと、敵の目的、いったいどういう存在なのか等、ごくごく自然なことだったが、当のキャンディはマズい、という顔をして久寿玉の中へと戻り引きこもってしまった。その直後に発せられた「キャンディ、ちょっとわからないクル」という言葉にその場にいた全員が絶句する。

「おまえなぁ、少しは自分の使命とやらを・・・・ん?」
「どうしたの?――――って、本?」
「こっちに来る・・・・って、滅茶苦茶速いやん!」

開いていた窓の外から見えるのは、此方に向かって飛来する本。それはまっすぐに進路を変えることなくつばきの部屋へと向かっていた。そしてその進路の先には――――みゆきがいる。

「危ない!」
「ふぇ?――――キャア!?」

咄嗟の判断でみゆきを押し倒して本を回避するつばき。しかし、それがいけなかった。

「あらあら・・・・」
「つばき、意外と大胆・・・・?」
「やよいは刺激がつよいな」
「え、なになに!?どうなってるのォ〜!?」

床に押し倒されたいみゆき。その上には当然、彼女を助けようとしてこうなったつばきがいる。二人の顔は距離にしてわずか数センチ。互いの顔がすぐ近くにあることに顔を真っ赤にし、みゆきは口を数回パクパクさせた後その華奢な躰からは想像もつかない程の腕力でつばきを押しどけた。平手は顔面にクリーンヒットし、成す術もなくそのまま後方に倒れた。

「ああ、すまない・・・・っと、これはいったいどういう?」

◇

「え～っと、つまりだ。ポップはキャンディの兄貴で、その妹がこっちでしっかりやれているかどうかを見に来た・・・こういうことでいいな？」
「ざっくばらんに言って間違いないでござるよつばき殿」

顔を赤くはらしたつばきがいかにも不機嫌そうに胡坐をかいて言う。まるでどこぞの殿様のようだと言いたいあかねだが、あえてそれを飲み込む。

「んで？俺のことも教えてくれるんだろうな？」
「もちろんでござる。キャンディ、伝説の戦士達の本をここに」
「・・・・クル？」
「おい、ちょっと待て。まさかおまえ・・・・」

落とした、らしい。みゆきと初めて逢ったときまではあったらしいが、それ以降は見てないとのこと。そんな重要な本をどうして今の今まで放置していたとつばきが問いただすと、キャンディが泣きそうな顔で「だって、だって」とポップの後ろに引っ込みながら言う。まあまあと宥めるやよいとなおだが、つばきの怒りは収まることはない。

と、そこへ。

「思い出した！あの絵本、〝不思議図書館〟に置いたままだ！」
「犯人はおまえか脳内花畑がァ！」
「ヒィィ!?」
「お、落ち着いてください！」

それからつばきを宥めるのに３０分の時間を費やし、なんとか冷静さを取り戻した後ポップの案内で不思議図書館へと赴くことに。なんでも、その空間へは本棚さえあればどこからでも行けるとのことらしい。特定の法則に従って本をズラスと、突然本棚が光り出した。どうやら通じたらしい。そしてそこへ吸い込まれるようにして入って行くつばき達。虹色の光の通路を抜けた先にみえたのは、たくさんの本を陳列させた、まる

でおとぎ話の世界に出てくるような開けた場所だった。周囲は木の根のようなもので囲まれ、遥か天井から優しい光が降り注いでいる。

「お、おまえらな・・・いい加減俺もキレてもいいんだぜ？」

つばきを下敷きに5人が空間から抜け出てくる。今日はずっとこんな扱いかと軽くへこむもそれでも一度怒っておかなければ気がすまない。

だが、そんなことはお構いなしに事態は進む。無事に絵本もみつかり、ポップによる読み聞かせのようなものが始まった。

内容はゲキリュウケンと聞かされていたものとほぼ同じ。メルヘンランドという絵本の精達が暮らす平和な国にある日突然バッドエンド王国の王、悪の皇帝ピエーロが侵攻を開始する。しかしのれはメルヘンランドの女王であるロイヤルクイーンにより阻止され、力を失ったクイーンはキャンディに伝説の戦士プリキュアと魔弾剣士リュウケンドーを探してくるよう命じられる。そして無事その目的は達成されたわけだが――

「・・・・続きはないのか？」

その次のページは全くの白紙だった。

「この物語の主人公は君たちでござる。だからこの先の続きは、君たちで作っていくでござるよ」

ひとしきりの説明を終えて、今回得た情報を脳内で整理するとこうなる。

1．敵の作るアカンベーは元々キュアデコルというもので、それを浄化し、奪われたデコルを取り返す。

2．敵もまた同じく親玉の復活を目的とし、バッドエナジーを集めるためにこの世界にやってきている。

3．デコルを集めてロイヤルクイーンを復活させ、バッドエンド王国を打倒する。

おおまかにいえばこの3つがプリキュアとリュウケンドーに与えられた使命であり、すべきこと。

（本当に見返りがないな・・・命がけで戦って、こっちには何もない。都合がよすぎる話だ）

心中で呟きながらつばきは思考する。別に見返りが欲しいというわけではないが、こうも何もないと本当に命を懸けてまでやることなのかどうかが怪しくなってくる。捻くれた思考だとわかってはいるものの、そう考えずにはいられなかった。

「――――それで、つばき君はどんなのがいいと思う？」

そうみゆきに言われて顔を上げる。なんの話だというつばきの反応を見る限りやっぱり聞いてなかったんだなと溜息をつかれた。

「折角５人そろったんだから、決めセリフを決めようよってことになったの」
「つばきはなんかあらへんの？」
「いや、俺プリキュアじゃないから心底どうでもいいんだけど・・・・」
「そこをなんとか！」
「お願いします」

そうは言われても、そうホイホイでてくるものではないので少し考える。いったいどうしてプリキュアでもないのにこんなことを考えなければならないのか疑問だが、この問答をいつまでも繰り返すときりがない為仕方なく考えることに。

「・・・・ダメだ、思い浮かばない」

とはいえ、自分に関係ないと考えてしまうとどうしても脳が仕事をしてくれない。結局のところ、この議題は３０分以上続き――――

〔つ、バッドエンド空間の気配だ！〕

ゲキリュウケンのこの一言があるまで、続けられた。